



趙勇さん 大いに語る

中国楽器楊(よう)琴(きん)の演奏家趙勇さんは1989年に来日、現在は多久市「孔子の里」音楽講師としてさまざまな活動に取り組んでおられます。その趙勇さんに中国及び日本での来し方を振り返って大いに語ってもらいます。

中国楽器楊^{よう}琴^{きん}の演奏家趙勇さんは1989年に来日され、現在は多久市「孔子の里」音楽講師として演奏活動をはじめ、地域にとけこんでさまざまな活動に取り組んでおられます。その趙勇さんに中国及び日本での来し方を振り返って、大いに語ってもらいます。場所は多久市の孔子の里「東原庠舎」で、聞き手は佐賀県日中友好協会文化部の尾形節子（多久地区日中）と犬山俊郎（小城地区日中）です。

序

——これから趙勇さんの今までの半生についていろいろと話してもらおうと思いますが、今、振り返ってみてどんな思いがありますか。

人には不思議なエン（縁）があって、そのエンに従って生きていくのだと思いました。私は中国に生まれた趙勇ですが、夢にも思わなかった日本に住むようになった。これも、このエンによって私の人生の道が開けて、がんばって生きてきたのです。

1. 子どものころ（楊琴との出会い）

——では先ず子どものころのことからお話してください。

私は1957年、中国の吉林省長春市で生まれました。日本でいえば昭和32年になります。

——すぐ日本の年号が出てきますね。

私も日本に来てから、いろいろちゃんと勉強したからね。（笑）

50年代と言うのは（もちろん後で知ったことです。親や先輩に聞いて）、中国の大変貧しい時代でした。食べるものも十分にはなく、ミルクなども不足していて配給制でした。粗食で育てられました。この時代はみんながそうだったのです。

この当時、父は鉄道局（鉄路局）関連の建築会社の経理の仕事についていて、母は同じ鉄道局病院の看護婦長をしていました。そして二人とも音楽活動に携わっていました。

父は、もともとオーケストラの指揮者だったのですが、そのオーケストラが解散になった後、市内の音楽愛好家に呼びかけて、新しい劇団を作ったのです。母もそこで現代京劇の出演者として活躍していました。両親の音楽活動の主な場は、中国全土の鉄道局の各地方分局を回るツアー公演でした。

私も両親の影響で、いつの間にか音楽を聴くのが好きになりました。この時代はテレビなどなく、ラジオしかない時代です。私は、ラジオから音楽が流れてくるといつも聞き入っていました。父はそんな私の様子を見て、この子は音楽が好きのようだ、音楽の才能があるならそれを引き出してやろうと考えたのかもしれない。

5歳のころだったと思う。ある公演の前の練習の時、試しに打楽器（京劇用のもので、日本の木魚

に似た楽器)を触らせてもらった。これは京劇のテンポをとるもので、これに合わせて俳優が歌うのである。練習の中で、私の打楽器と俳優の歌とがピタリと合うようになったのです。オーケストラの楽員もみんなびっくりして、大変ほめてくれたことを覚えています。こんなこともあって、私も公演に参加させてもらうようになりました。

小学校に入ったのは1966年です。両親とも鉄道局に勤めているので、長春鉄道第1小学校に入りました。1966年は毛沢東の文化大革命の始まりの年です。学校では、今までのような授業はほとんどなくなり、政治的な面が大変強調されるようになりました。知識・学問のある教師たちは走資本主義の当権派——資本主義思想の持ち主で、悪い人——ということで迫害され、下放(いなか・農村へ行き、労働をしながら正しい思想を学びなおす)されました。それに代わって工人(労働者)や農民が先生として学校にやってきました。このような中で知的な教育はおろそかにされ、毛沢東の教えばかりが広められました。

例えば、国民党との戦いや抗日戦争とか、政治的な面ばかりが強調されていました。世界中で一番幸せな国は、この毛沢東のいる中国である、などということが学校の授業の中心でありました。こんな世の中ですから、この教えに少しでも不満を言ったり、反対すれば迫害されました。

そのころの中国は、すべてが毛沢東思想を中心に動いていたのです。父母が活動していた現代京劇というのも、毛沢東思想によって構成されたものでした。父はこの劇団の中で、音楽活動に専念していましたが、一方では子どもの将来の生きる道についても悩み、考えていたようです。子どもには、やはり知識(学力)も必要だし、なにかの技(わざ)・技術を身に付けておくことも大切であると。今は、学校の勉強がストップしているが、このままでは子どもの将来にはよくない。このような思いの中から、父は私に楽器の演奏をさせ始めたのではないかと思います。

幸いなことに、私の学校の音楽室には中国の民族楽器や西洋のオーケストラ用の楽器などがたくさんありました。子どもたちはその楽器を自由にさわれました。先生も演奏してみせたりしてくれました。

小学4年生のころは、舞踊をしたり、楽器もいろいろさわってみたりしていました。そんな中で、音楽は面白い、音楽を頑張りたいという気持ちが湧いてきました。音楽の先生も、この子は音楽の才能がありそうだと、認めてくれていました。

ちょうどこのころ、学校で楊琴を新しく購入しました。それに最初にさわったのは私でした。そのとき、この楽器は大変音がきれいだと思います。それからは、自分なりにいろいろと工夫をしながら楊琴の練習をしました。もちろん、学校の音楽の先生(下放を免れた数少ない先生)にも教わりながら。

——「楊琴」は「揚琴」とも書かれていますが、どちらが正しいのでしょうか。

「楊」、「揚」どちらも書きますね。手偏の「揚琴」の方が多く使われていますね。今の中国では「扬琴」と書きます。「扬」は「揚」の略字(簡体字)です。

小学校3年生のころから簡体字がどんどん増えてきました。私が幸せなのは、元の字(繁体字)も略字(簡体字)も目にして育ってきたから、両方とも読むことができる。小学5、6年生ころは、小説が好きでよく本を読んでいました。まだそのころ、本屋にある本はほとんど繁体字で印刷されたものが多かった。私はそんな本を読んでいたので、ある程度両方ともわかります。今の若い人は略字(簡体字)しか知らないのでは…。

小学5年生ごろ、父からこの楽器が好きなら、この楽器を本格的に習ったらどうだと勧められました。正式に練習するなら先生をさがしてやってもいいと言われました。私ものんきで我がままだったの、「はい、いいです」とすぐ承諾しました。これがスタートとなったのです。

2. 楊琴に励む

——いよいよ楊琴奏者趙勇さんの出発ですね。

そうです。小学6年スタートした時点で、父から本格的な指導がなされるようになりました。まだ子どもだったので、そんなに厳しくは思わなかった。

このころも学校はだいたい午前中授業で、午後は休みになりました。昼食前に下校する。午後は、なにか毛沢東に関するイベントなどがある場合は学校へ行って練習する。何もなければ、だいたい午後1時ごろから5時ごろまで家で練習をしていた。

中国の習慣では昼は家に帰って食事するのが普通で、父母も同じように家に帰って家族全員（二人の妹も）で昼食をとった。昼休みは2時間ほどであった。

楽器の楊琴は、父が長春鉄道局から借りてきてくれていた。昼食後、私は別室で鍵をかけて一人で練習をしていました。このころも貧しい時代で、食料なども配給制だったのでおやつなどあるはずがない。お湯だけを飲みながら練習をしていました。ときどき窓の外を見ると、仲間たちが遊んでいるのが見えるときもありました。そんなときは涙が出てくることもありました。

父は、一人で練習している私をそっと確かめに来ることもあったらしい。家の外まで来て、練習している楽器の音を確認してそっと立ち去る。もし楽器の音がしていないときは、夕食のとき父は「今日は練習できたか？」と聞く。私が「はい、練習しました」と答えると、ひどくおこられました。まだ子どもだったので、父はだませないなあと思っていました。

専門の楊琴の先生が毎月1回家に来るようになりました。その時はもちろん父も同席して指導を受けました。父も音楽のプロでありますから、先生の教えたことを受けて、その後は父が私の練習を見てくれました。

苦しいながらもこの様に練習を続けて半年・1年と経過すると、だんだんこの環境にも慣れてきました。いつしか側に楽器（楊琴）がないときびしく感じられるようになりました。私自身ものすごく成長したと思えるようになりました。

——この様な中で中学校へ入るのですね。中学校では・・・。

中学校に入るのですが、ここはちょっと説明しなければわからないと思います。当時（毛沢東の時代）は小学校・中学校・高校合わせて10年間の教育制度になっていました。小学校6年、中学校4年で学校は卒業して、その後少なくとも1～2年間ほどは農村に行つて労働の教育を受けなくては行けない。しかし、2年間で戻れない人もたくさんいた。（労働教育で認められなければ戻れない。一生戻れない人もいた。）

そこで中学校に入るのですが、これは日本と同じようにそれぞれの地区の学校に入らなければならない。学区が決まっていた。私は鉄路第1小学校だから鉄路中学校に入らなければならないようになっていた。しかし、父は私を長春第67中学校に入れた。私もそこを希望した。

この当時の学校は、すべてナンバーで呼ばれていた。すべて平等だという意味で。私が入った長春第67中学校は、それまでは「長春市実験中学校」（現在は、またこの校名にもどっている）といつて、長春市ではあらゆる面でトップの学校であった。特に、音楽活動ではずば抜けていた。父は、

ここで音楽活動をしっかりやらせようと思ったのです。

余談になりますが、この当時私の父と同じように考えていた親たちも多かったようです。つまり音楽活動を希望する者は大変多かったのです。私の知る範囲ではこのころ、オーケストラの人や音楽に携わっている人たちは他と比べて幸せであった。なぜかという、このころはみんなが貧しい時代で、オーケストラの公演で地方へ出かける。この公演は国からの派遣で、演奏はタダだけど会社や団体の招待で歓迎されて、食事ができた。この貧しい中でごちそうを食べられた。みんなうらやましがった。

オーケストラに入るのはとても難しかった。おいしいものが食べられるということだけではなく、音楽を習いたいという人は大変多かった。他の文化的な活動を選んでもダメで、例えば書道などを励んでもダメ。文化的な活動はダメなのです。…文化大革命だったのです。しかし、音楽だけはよかったです。毛沢東思想を称える武器となったからです。だからこのころの歌は、ほとんど毛沢東のことばで歌詞が作られていました。毛沢東を称えるものばかりです。

3. 中学校時代

——中学校での勉強はどんなものでしたか。普通の授業は。

政治思想に関する教育が多かった。数学や物理、化学のどの授業は普通にありました。成績はあまり厳しくいわれませんでした。まだ良心的な先生もいくらかは残っておられました。私が今も記憶に残っているのは、女性の数学の先生です。大変すばらしい先生でした。

小学校と同じく、中学校でも授業は昼までで、午後からは授業はありません。

——それではみんな午後からはどうしていたのですか。

いわゆる部活動のようなものがいくつかありました。しかし、多くの生徒は帰っていました。そうですね、2/3以上の生徒は帰っていました。私の部活は、学校の毛沢東宣伝隊とでもいうのでしょうか、学校のオーケストラに参加して活動していました。学校には素晴らしい楽器がたくさん置いてありました。

——このころ、趙勇さんはどのように自分の練習をしていたのですか。

学校でのオーケストラ活動の後、自宅で練習を続けました。もう父の監督がなくても、自分で頑張ろうと思っていました。

中学校4年間は、本当に一生懸命練習しました。おもしろくなりました。私もプロになろうと思っていました。少しずつ今の時代のこと、将来のことなども考えるようになっていました。

この時代は、今振り返ってみると大変な時代だったと思います。

小学5～6年ごろからは、ほとんど授業もストップしていて、治安も悪かった。スリなども多かったし、子どもたちのケンカも多かった。二つの派に分かれてケンカする。二派とも毛沢東思想を守るために戦うのです。その守る方法が異なるために戦うのです。最初は小さなグループから、だんだん大きくなり、ついには全国的な集団になって行った。

最終的には武器を持つようになっていった。1967～8年ごろには、毛思想を守るため銃撃戦まで始まった。軍隊の武器庫から銃を持ち出して、二派に分かれて戦った。「紅色革命委員会」と「第二革命総部」の二派だったと思う。死傷者も出たと思います。

このころになると会社や工場などもストップしていた。鉄道もストップした。ただ一部の自動車だけは動いていた。若者を北京に送るためだけ。当時、一般人は簡単に北京へは入れなかった。毛沢東はほぼ毎日のように、天安門広場で若者たちと面会している。普通ならとても毛沢東には会えない。各地方から中学生や大学生たちが毛沢東に会うために、自動車に乗って行く。そのための自動車は動く。自動車は満員で、タダである。天安門広場では「毛沢東万歳!」「毛主席万歳!」である。

当時、劉少奇など毛沢東に反対する者は退けられて、林彪だけが毛沢東の信頼を得ていた。毛沢東主席と林彪副主席ではなかったかと思う。毛語録の小さな手帳は林彪の発想で作られた。この手帳を持たぬ者は違反者となった。ほかに周恩来もいましたが、中国人にはいろいろと評価の分かれる人でした。

——このようにいわば乱世で、中学時代を終わるのですか。

中学の終わりは1976年です。中学卒業間近の時に毛沢東が死にました。その後、本当にいろいろな事件が起きました。一番大きな出来事は江青など4人組の逮捕です。

当時、江青は私たちの活動する音楽や演劇の最高指導者で、現代京劇は彼女が支配していました。彼女の作った八つの劇は全国で大々的に演じられていったのです。私たちも彼女の指導の下で演奏活動をしていたのです。

中学卒業前のちょうどこのとき、隣の町の九台县で文化工作団（小さなオーケストラ）の団員を募集していると、父が知らせてくれました。そこですぐ楽器を持って試験を受けに行きました。その場ですぐ入団が決まりました。父は、私が下放して農作業で手が壊れるよりも、一時的にでもここに入団した方がいいと勧めました。それで、中学卒業する前に入団しました。このとき父は、もう一つ私のために頑張ってくれたのです。それは戸籍を移さずにすむようにしてくれたのです。この当時中国では都会からいなかにはすぐ移動できたが、いなかから都会に戻るのは大変難しかった。いなかの文化工作団に入団して働くのだから、本来は戸籍を移さなければならなかったのであるが、父の尽力で戸籍は動かさずにすんだ。

中学校は卒業せずに、この文工団オーケストラで1年間ほど働きました。わずかですが給料ももらいました。



趙勇氏(中央)インタビュー中の小城地区日中理事
犬山 俊郎氏(右)と多久日中理事中尾彩節子さん(左)

4. 文工団から吉林省歌舞団へ

——毛沢東が亡くなった後、世の中は大きく変わって行ったでしょう。

そうですね。1976年9月に毛沢東が死去し、華国鋒が主席となり、毛沢東の文化大革命は終結しました。77年には知識青年の下放もすぐ中止となり、大学ももと通り入学試験を実施し始めました。

このころ、私は九台県の文工団（文化工作団）に入って演奏活動をしながら、世の中の激しい動きを見ていました。人々の暮らしはやはり貧しくて、配給制度はまだ続いていました。76年には父が体調を崩し、後に腸ガンだとわかりました。すぐ手術をして家で養生をすることになりました。私は文工団をやめて父の看護にあたろうと思い、文工団に申し入れましたが、やめさせてはもらえませんでした。

このようなとき、吉林省歌舞団が演奏者を募集していることを知りました。私は再度文工団に、父の面倒をみるという理由で休みを申請して、許可されました。休みをとった私はすぐ吉林省歌舞団の募集に応じて、すぐ試験を受けに行きました。受験者は多かったですけれども、6人の合格者のひとりに入り、合格することができました。そこで、長春市にもどり、しばらくは試用期間として歌舞団で演奏活動に参加していました。

——趙勇さんの実力もあったからでしょうが、大変うまくいきましたね。

ところが、ここから難問が発生しました。私の身分はまだ九台県の文工団にあるのです。その私が歌舞団で演奏活動をしているのです。そのことが文工団にも知れてしまい、文工団の方から歌舞団の方に私を戻すようにとの要請があったのです。歌舞団の方は、いまや重要な人材であるので渡せないというのです。ここで双方の交渉が始まったのです。いろいろなかけ引きがあった後、歌舞団の方が押し切ったのです。この間、私は個人的にはなにも動いていません。これには双方の力関係からもはっきりしていたのです。歌舞団は「省」級であり、文工団は「県」級（日本では「町」にあたる）だから、「省」が「県」を抑え込んだのでしょう。この結果、私は長春市にもどり「吉林省歌舞団」の一員となれたのでした。

5. 瀋陽音楽学院入学

——1978年やっと吉林省歌舞団で演奏活動を始めたのに、この後すぐ大学にはいるのですね。

ここでしばらく活動していましたが、人間の思いには終わりはなく、もっと先へ進みたいという思いが、大学進学を考えさせたのです。

やっと私を引き受けてくれた楽団ですから、楽団に相談しました。楽団は、大学を卒業したら再びこの楽団に戻るという条件で、受験を許可してくれました。そこで瀋陽音楽学院（4年制大学）を受験したのです。

6月に試験を受けました。いろいろな楽器ごとに合格が決まるのです。楊琴は4人が合格でしたが、私はその4番目で合格したのです。(しかし、その後半年の頑張りで1番になりました。それを卒業まで通しました。)9月に入学しました。中国は9月が新学期です。

—— **81年の卒業までの4年間、音楽の勉強をみっちりやったのですね。**

そうですね。音楽の科目を幅広く勉強しました。特に作曲や編曲など、その後の私の活動に大変役立ちました。もちろん楊琴の練習には力を入れました。学内で私の練習時間の長いことは、大変評判になっていました。苦しかったけれども、一番力を入れました。

卒業する時は卒業試験がありますが、私の場合は私だけの楊琴ソロコンサートを開くようにと、教授から言われました。このコンサートに全教授が参加するということでした。個人の楊琴ソロコンサートを開くのは、瀋陽音楽学院開学以来のことだと、大変注目されました。コンサートは大成功で、最後には学長から、大学の歴史に残るコンサートであったと、大変にほめられました。

—— **そのほか、大学での生活はどんなでしたか。**

大学ではみんな寮に入ります。学費は、個人で出す必要はありません。すべて国費で賄われます。ただ、食費や自分で買う参考書代(教科書代は不要)やその他生活費は必要です。当時私は、母から10元と省(吉林省歌舞団に在籍しているため)から10元を毎月貰っていました。これですべてを賄わなければなりません。学校の食堂では最初に食券を買っておくのですが、1ヶ月だいたい18元ぐらい必要です。それを節約して参考書などを買うのにあてていました。ときには、高粱だけの飯に醤油をかけて食べることもありました。食事の工夫が一番たいへんでした。

大学構内の映画館では、だんだん外国の映画なども上映されるようになり、日本の「おしん」も大変人気がありました。しかし、私はチケットの2角が買えなかった。見かねて楊琴の先生がチケットを買ってくれたこともありました。

—— **友達などはどうでしたか。**

そうそう、今になってはもう話してもいいでしょう。学校ですから試験もありますね。ある学期試験のときのことで。和音を聴き取るテスト、聴音のテストです。私は得意としていたのですが、不得手の友達5、6人がそっと教えてくれというので、私はそっと答えを教えてやりました。するとそれが見つかり、監督の先生から君は不合格にすると宣告されてしまいました。

—— **カンニングがばれたわけですね。それは大変なことになりました。どうしましたか。**

友達は心配するなというのです。友達は後でお土産を持って、先生のところに交渉に行って、なんとか闇にほうむってくれたのです。私は行っていません。友達からは大変感謝されました。

こんなこともあって、休日などには友達が肉を食べに連れて行ってくれることもたびたびありました。貧しい食事の時代に、大変助かりました。多くの友達も、音楽のことでは私を信頼し、頼りにしていたようです。

6. 父の死(医療ミス)

—— **お父さんは、趙勇さんが大学に入ってすぐに亡くなられたそうですが、どのような経過だったのですか。**

そうですね。私の大学合格は父に知らせることができましたが、残念ですがその後すぐ父は亡くなりました。話せば長くなりますが…、実は父の死は医療ミスによって早まったのでした。

1回目の手術は盲腸炎という診断で、鉄道病院で受けました。母もこの看護婦長をしていましたので、盲腸炎の手術なら簡単にすむだろうと思っていたのです。ところがその後父の腹痛は治

まりませんでした。後で母は、手術に立ち会った同僚の看護婦から「父の盲腸は炎症を起こしてはなかったが、切除された。しかし、すぐ傍の腸のところにアンズの実ほどの腫瘍のようなものがある、それはそのままにして、元に戻された。」ということを知ったのです。

初めの手術から1年ほどして、今度は吉林省医科大学で診断を受けると腸ガンだとわかり、すぐ手術を受けました。この手術には鉄道病院の医師や看護婦も研修見学として立ち会ったそうです。もちろん母は入れません。後で、立ち会った人の話では、1年前はアンズの実ほどだったものがアヒルの卵ほどの大きさになっていたそうです。

父のガンは転移しやすいものではなかったそうですが、大きくなりすぎて腹壁の内側に密着していて、皮膚までもガン細胞に侵されていたのです。1年前に見つけていて、ほったらかしてこんなに悪化させてしまったのです。

母は父の死後しばらくして、父の1回目、2回目の手術の経緯を知り、どうにも納得できなかったもので、これは明らかに医療ミスではないかということで裁判に訴えました。医療裁判は大変難しいのですが、最終的には医療ミスがあったと認められました。

その結果、国はその保障の義務が生じます。私の家族は、母と私は自立していますが、妹2人がいます。上の妹は父の会社に自動的に就職させることになり、下の妹はまだ中学生だったので、大学を出て就職をするまでの生活費を国が保障することになりました。

7. 吉林省歌舞団にもどる

—— 81年に大学を卒業すると、再び吉林省歌舞団に戻ったのですね。

そうです。実は、大学に残って教師になってほしいという要請もありました。しかし、歌舞団との約束もありましたので断りました。私には演奏活動のほうが楽しかったし、もう一つは、歌舞団には王艶さん（現夫人、後出）もいたのです。

—— 歌舞団に戻ってよいよ演奏活動に取り組むのですね。またこのころになると文革も終わり数年経ちますから、世の中もだいぶ変わってきたのではないですか。

まず、私の在籍する吉林省歌舞団は、私が大学に入った時に、「吉林省歌舞劇院」と名称が変わり、とても大きな楽団になりました。

私の記憶にある当時の「吉林省歌舞劇院」の概要は、以下のような構成だったと思います。

4つの楽団で構成されていた。

- | | | | |
|--------------------|----------|-------|-------|
| ○交響管弦楽団（洋楽のオーケストラ） | 演奏者、スタッフ | 100人超 | |
| ○歌劇団 | 60人前後 | ○舞踊団 | 60人前後 |
| ○民族楽団（私の所属） | 80人超 | | |

（民族楽団の構成）

- | | | | | | | | |
|-----|----------|-----|-------|------|----|------|------|
| ・楊琴 | 3人（私を含め） | ・琵琶 | 7人 | ・チェロ | 4人 | ・ベース | 3人 |
| ・横笛 | 4人 | ・箏 | 4人 | ・ラッパ | 4人 | ・打楽器 | 5～6人 |
| ・笙 | 4人 | ・二胡 | 30人ほど | ・指揮者 | 2人 | | |

この民族楽団は、中国4大民族楽団の一つに数えられていた。

私は、楊琴演奏のほかに、編曲も手がけていた。後々には指揮も望まれていた。

私が大学を卒業するころまでは、まだ配給制は残っていて配給券が30数種（衣料券なども）あったと思います。一方、自由市場なども現れて、少し高いけれども券がなくても買えるところも出てきました。82年～83年ごろにこの券は徐々になくなったように思います。

あの四人組が逮捕された後、音楽も開放されて以前の美しい音楽などもラジオから流れるようになってきました。鄧小平の改革開放の時代が始まり、特に開放の方が身近に感じられるようになりました。外国の様子などもラジオやテレビで知ることができるようになりました。当時、12型白黒テレビが普及していました。

私が楽団に戻ってすぐ、外国との友好交流が始まり、私も国の代表団の一人としてまずは北朝鮮へ行きました。吉林省のすぐ隣ですから。北朝鮮には2回行きました。それからカナダにも行きました。そのときは日本経由で。カナダの北の方の都市と吉林省が姉妹都市提携をするための友好訪問団として行きました。このときは、ほとんどが団体行動で、自由な行動は制限されていたのですが、目にするものすべてが驚きでした。今まで、中国が一番幸せな国だと教育されてきていたけど、都市の姿にも文化の発達の違いを強く感じ取りました。大変な驚きでした。外国はすばらしいという思いと、外国へ行きたいなあという気持ちもわいてきました。

年代が更に進み、86・87年ころになると改革もどんどん進んで行きました。以前は給料もほとんど上がらなかったけれども、このころになると年齢によるのではなく、能力（技術）ある者にはそれなりの給料が支給されるようになった。私は常に、同年代の人たちより一ランク上の給料をもらっていました。

8. 中国民族楽器演奏会で優秀賞を得る

——楊琴奏者としての趙勇さんをいちやく有名にしたコンクールとはどんなものでしたか。

これは82年8月に開催された「中国民族楽器演奏会」という民族楽器演奏のコンクールです。四人組逮捕後初めての全国コンクールでした。吉林省からは私を含めて4人が選ばれ、各省からも選ばれた民族楽器演奏家が多数集まりました。私は楊琴ですが、さまざまな民族楽器奏者が集まり、山東省済南市で三日間昼夜を通して行われました。

——そのとき趙勇さんが演奏した曲が「満族舞曲」だったのですね。

そうです。演奏する曲は自由です。多くの出場者は、古来の名曲を選んで演奏していました。私は自分で作曲をした「満族舞曲」を演奏したのです。自作の曲を演奏したこともよかったのかもしれませんが、優秀賞を受賞しました。100元の賞金ももらいました。

——すばらしい。100元の賞金も当時にしては破格ではないですか。

そう、大変うれしかった。更にはこのとき泰山にも登り、曲阜にも行かせてもらいました。

初めて泰山に登りました。当時はもちろんロープウェイもありません。朝早く出発して夕日の沈むころに到着です。180の石段が18ヶ所あるのです。もちろん石段ばかりではありません。とても疲れます。しかし、景色が次々に変わりすばらしかった。登り切ったときには、感動で涙が出るほどでした。このとき、曲阜にも行き、孔廟や孔林、孔府なども見ることができました。孔林の石碑が壊され、倒されたままになっていて、文化大革命の孔子批判で、紅衛兵によって壊されたものが、まだそのままになっていたのです。

——このコンクールは趙勇さんにとって実り多いものだったですね。

もう一つ、これによって「中国音楽家協会会員」に推挙されました。

(2013. 7. 30)



9. 吉林省民族楽団での演奏活動

——楊琴奏者・音楽家としての趙勇さんは、吉林省民族楽団での演奏活動を通してその才能を磨いて行かれたのですね。楽団の演奏会は、どんな所で、どのように行われていたのですか。

私たちの楽団は吉林省の民族楽団ですから、吉林省を中心に各市・各町を回って演奏をしていました。演奏会でよく使われた会場は吉林省賓館とか、大きいところでは長春市体育館などです。当時は、すべて国からの指示で、指定されたところへ出向いての演奏です。お客さんも今のようにチケットを購入してではなく、国からの招待です。国の宣伝であり、国家の威信を示すものだったのです。

中国は広大で、同じ漢民族だとは言っても、各地方によって生活習慣が違う。例えば四川省と私の吉林省では習慣も大きく違う。同じように文化の面でも違う。音楽についても各地方でそれぞれ特色があり、メロディーにも違いがあります。例えば、上海地方には上海地方の、広東地方には広東地方独特のメロディーがあります。

私の東北地方吉林省には、吉林省独特のメロディーがあり、民族音楽があります。私たちの楽団は、地元東北のメロディーを取り入れて作曲したり、編曲したり、演奏したり、歌ったりする活動です。地方の代表的なものを発表するのです。演奏の形も大グループ（60～70人）や小グループ（20人前後）での演奏など様々です。

私は楊琴演奏のほか、小グループで演奏する曲の作曲や編曲もしていました。楽団には民謡を歌う歌手も多数います。その民謡の編曲も私が担当していました。私は大学を卒業したばかりでしたが、大忙しでした。しかし、これは私にとって大変な勉強になり、後々の大きな力となっていったのです。楽団の上層部では、後々には私に作曲家・指揮者として活躍することを期待していたようです。

10. 中国の民族音楽

——東北地方の音楽は趙勇さんの「吉林省民族音楽楽団」で演奏されますが、ほかの地方にもそれぞれの民族音楽演奏の楽団があるのですね。

そうです、大小さまざまたくさんありました。中でも一番有名なのは、当時、中国四大民族音楽楽団といわれていたものです。成都の「四川省民族音楽楽団」、上海の「上海市民族音楽楽団」、北京の「中国中央民族音楽楽団」、私たちの「吉林省民族音楽楽団」の四つです。国営の楽団です。

——国直轄ですか。

そうです。だから国の指示に従っての演奏活動になるのです。

——音楽を言葉で説明することは困難かもしれませんが、例えば東北地方の音楽の特徴とはどんなところにありますか。

うーん、メロディーを聞いてもらえばすぐわかると思いますが、内省的なところはなく明るいメロディーばかりです。明るくてテンポも速い。私の日本語ではうまく表現できないが、一言でいえばそう言えます。

笑い話ですが、東北の人がスーパーなどに肉を買いに行きますと、少なくとも500gから1Kg以上は買います。上海の人は多くても100gぐらいしか買わない。野菜を買うのも同じようです。ここに東北人と上海人の生活習慣の違いが表れているように、音楽においても同様で、東北の音楽はおおらかで明るくて楽しい。美しいメロディーは上海近くの音楽に多い。広い中国ですから住んでいる地方によって生活習慣が違い、文化や人間の気持ちも違います。当然、音楽にもそれは反映されてきます

私は大学時代、全国の民族音楽をたくさん聞き勉強しました。今でも或るメロディーを聞かされても、どの地方の音楽であるかすぐわかります。90%ぐらいはね。

もう一つ、中国の民族音楽は、実は中国の地方演劇と深いつながりがあるのです。各地方で演じ続けられてきた演劇にも、それぞれの特色があるのです。例えば、北京の京劇、上海地方の越劇、四川省の川劇、山東省の呂劇、東北の吉劇など、まだまだあります。これらの地方演劇と地方の音楽である民族音楽とは密接な関係をもっているのです。例えば、ある地方の民謡から劇が構成されて演じられる。音楽と演劇は一体的にその地方の特色を育んできたのです。

1 1. 「満族舞曲」作曲のころ

——趙勇さんが生まれ育った吉林省長春市は、中国の東北地方で少数民族の一つである満族（満州族）が多数住んでいるところですね。

そうです。万里の長城の外側で、満族や蒙古族（モンゴル族）が多く住んでいます。満族は中国最後の王朝である清王朝を建てて約250年中国全土を支配した民族です。しかし、自民族の文化を守らず漢文化になじみ、どんどん漢化していったのです。その後の中国は清王朝の崩壊、その後の動乱、そして毛沢東の時代へと移って行きました。

毛沢東の時代は、共産党を讃える文化です。民族文化など問題外です。満族発祥の地である東北地方でも満族の文化は風前のともし火、消えかかっていたのです。

そして毛沢東の死です。私が住んでいる周りには満族の集落もたくさんありました。毛沢東が亡くなってしばらくすると、今までは禁じられていた祭りやいろいろなイベントが満族の集落で行われるようになってきました。お祭りのテーマは豊作祈願であり、神への祈りです。宗教的な雰囲気もあります。民族の衣装をまとい、独特のメロディーに合わせて男女が踊ります。今まで消えかかっていた民族の踊りや歌を表現しているのです。

私にとっては生まれて初めて観るものでした。とても感動しました。すばらしかった。祭りの人々の願いや喜びが伝わってきました。この体験がもとになって、私は「満族舞曲」を作曲しました。忘れ去られようとしていた満族のメロディーを掘り起し、満族の豊かさを表現しました。この曲は、吉林省のラジオ局で放送され、更には全国のラジオ局から放送され大好評でした。全国の音楽家をはじ

め、多くの人たちから称讃されました。大変嬉しかったです。

12. 王^{おうえん}艶さん（奥さん）と結婚

—奥さんの王艶さんは今、多久市で「大清花」という中華料理店を開いておられますが、本来は琵琶奏者で音楽家であったのですね。王艶さんとの出会いのころから結婚までのころのことをお聞かせください。最初に出会ったのは・・・。

同じ中学校だったのです。入学も同じ。前にも話したように私は学区外の実験中学校に入ったのですが、ここは彼女の学区内の中学校だったのです。二人とも同時に同じ中学へ入学したのですが、もちろん最初は彼女のことは知りません。

前にもお話ししたように、当時この学校の音楽活動はずば抜けていました。私も入学するとすぐ民族楽器演奏の部活に入りました。そこに彼女（王艶さん）も入ってきたのです。彼女は琵琶で、私は楊琴です。その後中学卒業まで、同じ民族楽器奏者として練習を共にしてきました。時には「吉林省民族楽団」の団員に来てもらって指導を受けることもありました。

—同じ部活をする中で彼女へ惹かれるものがあったのですね。

うーん、まだこのころは特別の思いはありませんでした。私の卒業頃は前にも話したように大変忙しかった。彼女は卒業後、「吉林省芸術学院」（3年制、日本では短大にあたるかな）に進んだ。ここは音楽・美術・書等の学科があります。私は、その後いろいろなことがあって「瀋陽音楽学院」に入るのです。ここに入ってから彼女との手紙のやり取りが始まったのです。大学卒業するまで続きました。

—この間に彼女への思いが動くのですね。

そうです。手紙の中でも彼女はとても優しい人で、いつしか彼女への思いが少しずつのって行きました。

—彼女の方はどうだったのでしょうか？

うーん。彼女の方も同じだったようです。大学は夏休みが長い。私は夏休みになると彼女を誘ってよくデートしていました。そんな中で、お互いに心が惹かれていったのは間違いありません。

—彼女は芸術学院卒業後、すぐ民族音楽楽団に入るのですね。

そうです。正式には彼女の方が先に入団しています。私は大学を卒業するとき、教授から大学に残ってくれないかと言われたのですが、それを断って楽団に戻ったのです。もちろん楽団との約束もありましたが、彼女が楽団にいたことが大きな理由です。

私が楽団に戻ってからは、同じ演奏者として彼女とほとんど同じ活動をしておりました。もうここではお互いに心を許せる人として付き合っていました。いつの間にか、先輩の楽団員たちからも二人の間柄を認められるようになり、結婚を勧める声も上がるようになりました。そのように、私は大学を卒業し、長くせずして結婚しました。お互いの両親も心から祝福してくれました。

—結婚は何歳の時ですか。

うーんと、24か25のとき・・・。そう、25歳になっていました。

あのころは結婚できる年齢の決まりがありました。二人の年齢を合わせて50歳以上にならないと結婚届が受け付けてもらえなかった。彼女も私とは同級生ですから、お互いに25+25で丁度50歳になっていたのです。なんとか年齢はクリアしていました。私は彼女より2か月ほど上になります。結婚したのは4月です。

——結婚しようという気持ちはどちらが強かったのでしょうか。

二人ともいっしょ。同じ気持ちだったのです。中学時代からいっしょだったからこうなったのだと思います。翌年には長男が生まれました。子どもが生まれたことで、彼女は長期間出張の演奏活動は中止しました。私たちの演奏活動は、省内の各地区を回ってのものですから、1回に半月や20日間ぐらいは家を留守にしなければなりません。楽団の方でも彼女には子どもの養育に専念できるように図ってくれました。

このころの演奏活動では、都市部だけではなく農村部へもよく行きました。だから、当時の農民のさまざまな様子も見えています。国から指定で、人民公社の豊かな村などにも招待されたこともありました。食事ではさまざまな豚肉の料理が出され、私たちには大変なごちそうでした。また、軍隊への招待も多かった。軍隊も物は豊富で、ビールなども飲み放題であった。私たちの演奏活動での楽しみの一つは、このように当時としては珍しい、いろいろな地方でおご馳走にあずかることでもあったのです。

1 3. 「北国の春」「知床旅情」

——また音楽の話に戻りますが、民族音楽以外で今までに趙勇さんが心惹かれた歌や音楽にはどんなものがありましたか？

そうですね、先にもお話ししましたが、当時の社会状況ではヨーロッパの音楽はほとんど聞くことはできなかった。日本の音楽も同じです。毛沢東の時代はすべて禁止です。鄧小平のころになって少しずつ日本やヨーロッパの音楽も聞けるようになってきました。大学に入ってからやっとヨーロッパや日本の音楽に接することができたのです。

大学に入って、たくさんのヨーロッパ音楽を知りました。大変すばらしいと感激しました。教科書などで多くの音楽家も知りました。しかし、当時は旧ソビエトとの関係で、ロシアの音楽家やその作品が多く取り上げてあった。チャイコフスキーとか……。大学で学習する音楽作品などもロシアの作品が多かった。

——日本の音楽は？

日本の音楽はもっと少なかった。そうですね、私が大学1～2年のころ「北国の春」が入ってきたと思う。中国の有名な歌手が同じメロディーを、中国語に翻訳した歌詞で歌って、全国ではやりました。後に私が吉林省楽団に入ってから、楽団の一人の歌手がこの歌を歌うことになり、編曲を私が担当しました。この編曲を私が尊敬していた先輩から大変ほめられたことを覚えています。

その後しばらくして「知床旅情」が入ってきた。このメロディーはすばらしい。今でもこのメロディーはすばらしいと思っています。私の演奏会には必ずこの曲は持って行きます。

日本の童謡もすばらしい。これは日本に来てから知りました。たくさんありますね。この童謡については私もいろいろ勉強しました。日本の童謡はいいですね。演奏会ではこの童謡も入れるようにしています。

(2013. 10. 23)



14. 初めての日本へ

—ではこのへんで、吉林省民族音楽楽団で存分の演奏活動をしていた趙勇さんが、どのようなきっかけで日本へ来ることになったのか、当時の趙勇さんの思いも含めてお聞かせください。

日本へ来たのは、平成元年4月4日です。先に日本へ来ていて、福岡などで演奏活動をしておられる趙国良さんの誘いがあって、同僚の楽団員3名（私を含めて）と一緒にやって来ました。

当時は改革開放路線が始まり、外国の様子などもテレビを通して少しはわかるようになっておりました。特に経済発展めざましい日本を一度は見てみたいという思いは、同僚の楽団員たちにもありました。私も同じ気持ちでした。そこで私も、観光ビザ（3ヶ月間有効）を取って趙国良さんの誘いに応じたのです。

—日本への入国は福岡空港ですか。

いいえ、長崎空港です。当時は中国からの福岡便はまだありませんでした。九州に行くには長崎空港しかありませんでした。上海から長崎空港です。そして車で福岡まで行き、趙国良さんのお宅に私たち3人は到着したのです。

—当時、趙国良さんはどこに住んでおられたのですか。

姪の浜の市営団地です。小戸団地と言っていたと思います。団地の5階で、エレベーターもありません。2DKぐらいの部屋だったでしょうか、趙国良さんご夫妻と子どもさん2人で住んでおられました。そこに私たち3名はお世話になることになったのです。

この団地の別の棟には、先に日本に移住しておられた国良さんの奥さんのお母さんや、奥さんの兄弟家族も住んでおられました。

—最初の日本は福岡市だったのですね。どんな印象でしたか。

まず、車の多さに驚きました。また、若者が車を持っている。当時の中国では考えられないことでした。しかも道や街中がきれいでゴミが見えない。中国の街しか知らない私には、やはり驚きでした。

スーパーに買い物に行くといろいろなものがいっぱい並んでいる。日本人の生活の豊かさを感じ

ました。物の豊かさだけでなく、環境や生活の便利さなど当時の中国との違いを強く感じました。
——そのころの日本は、まだ住環境は十分ではなかったと思いますが、狭い趙国良さんの家でも大変だったでしょう。

そうですね。それが趙国良さんのところに着いてみると、国良さんの手配で私たちの演奏会の予定がいくつか決まっていたのです。驚きました。一緒に来た3人と趙国良さんの4人の演奏会です。

私と一緒に来たのは、私と同年代の男性で、琴奏者の江舟（こうしゅう）さん、もう一人は年配の女性で、琵琶奏者の曾桂芝（そけいし）さんです。それに私の楊琴と趙国良さんの二胡を加えて4楽器の演奏会です。

趙国良さんは、私の尊敬する大先輩です。当時、吉林省民族音楽楽団の二胡奏者であり、楽団のマスターでした。私が入団する時の審査委員長でもありました。私が入団してからは、私の音楽の才能を認め、さまざまな活動の場を作ってくださいました。将来は私に楽団の編曲者・作曲家として、また指揮者としての活躍を願っておられたようです。

その趙国良さんが、私が日本へ行く2年ほど前（昭和62年？）に日本へ行ってしまわれたのです。そこにはいろいろと複雑な事情があり、趙国良さんも悩んだ末に決断されたようでした。

というのは、国良さんの奥さんのお母さんは日本人で金子美智子といわれます。日本で中国人の留学生と結婚して中国に移住していたのです。そこで1男3女が生まれて、その一人の女の子と国良さんが結婚していたのです。だから国良さんの奥さん（中国名 李愛民）は日中の混血です。日中国交正常化した後も、なかなか中国在留日本人の帰国も進まなかったけれど、87～8年ごろになり「残留孤児」「残留婦人等」の日本帰国の動きが出始めました。その時に国良さんの奥さんの兄弟家族と奥さんの母親（金子さん）は、みんな日本への移住を決めたのです。ただ、国良さんの家族だけは日本行を決断できなかった。日本へ行っても今のような音楽の活動ができるかどうか、それによって生活ができるかどうか心配だったのです。奥さんの兄弟家族が全部日本へ帰った後も、国良さん一家は残って、国良さんは楽団での活動を続けていました。しかし、その後2年ほどして国良さん一家もついに決断されて日本へ移住されたのです。

そこが、福岡市の姪の浜だったのです。

趙国良さんは日本に来て1年半から2年ほど経っていたと思います。ご苦労もあったと思いますが、なんとか念願の日本での演奏活動もうまくいっていたようです。その中で、いろいろな人脈もできていたのでしょう。そこで、私たちとの中国楽器の演奏会を思いつかれたのだと思います。

私たちは3ヶ月の観光ビザであっても、日本人の身元引受人つまり保証人が必要だったのです。それは、趙国良さんの知り合いで、当時KBC放送の文化部長をされていた湯川茂光さんという方に引き受けてもらったのです。この趙国良さんと湯川さんのお二人によって演奏会などの計画が作られたのだと思います。

15. 日本での演奏活動

—日本へ来たなら早速演奏活動ですか。それは趙勇さんたちにとっては、願ってもないことではなかったのですか。

とんでもない。楽器はそれぞれが持って来てはいたのですが、みんなでの練習が必要です。それよりももっと大切なのは、四人で合奏するための編曲された楽譜が必要です。この編曲が大変です。

この編曲は、全部私がするのです。短時間ではとてもできません。時間がかかります。1曲仕上げるのに一晩かかることもあります。例えば日本の童謡などの歌詞とメロディーだけの楽譜をもらって、これを四つの楽器の合奏曲に作り上げねばなりません。更には、その曲に込められた想いや歌詞の意味も編曲では大事です。私たちは、日本語がわかりません、読めません。だから、それらのことは趙国良さんの奥さんのお母さんに全部聞くのです。奥さんのお母さん(旧姓金子さん)は、日本語も中国語もわかるから。また、大きなオーケストラで演奏する曲を、四つの楽器用に編曲しなければなりません。たくさん曲を編曲しておかないと演奏会は開けません。

編曲が出来上がるとすぐ練習です。練習のあいまに並行して編曲です。国良さんの狭い部屋の一室での練習です。練習を見に来ていた湯川さんは、四つの楽器による演奏を大変気に入って、ほめてくれました。

—どんな曲を選んで編曲し、演奏したのですか。

そう、最初は「青い山脈」「浜辺の歌」とか・・・「花」「隅田川」とか「黒田節」「ソーラン節」・・・そのほか沢山の童謡など・・・

これはみんな金子さんに教えてもらって編曲したものです。例えば「青い山脈」は戦後の日本人が明るく生きて行こうとしているイメージですとか、いろいろと曲の想いを教えてもらいました。

—最初の演奏会はどこでしたか。

住んでいる団地の公民館です。最初の試みの演奏会です。団地の区長さんをお願いして、無料で団地の皆さんに聞いてもらい、その反応を確かめることです。みんなに喜んでもらいました。湯川さんもこれを見て、今後の演奏活動ができると確信されたようでした。

—この後、いろいろな所で演奏会を行ったのですね。

そうです。福岡のいろいろな会場で。多久の中央公民館でもしました。以前には、趙国良さん一人の演奏会も多久であったはずで。というのは、湯川さんはもともと多久市出身だったそうで、そんな関係で、大平庵の木下さんや文化連盟の野方さんや不二見先生、元の市長の百崎さんを通じて多久との関係もできていたのでしょう。

—各地での演奏会は盛り上がりましたか。

そうです。どこでも大好評だったと思います。最初の団地の公民館以外は、みんな入場料をもらっての演奏会です。ここに一つの問題があるのです。私たち3人は観光ビザでの滞在ですから、法律上収入を得るような活動はできません。もちろん商売などは禁止です。趙国良さんの方は収益活動はできる。問題ありません。そのような身分ですから私たち3人は、民間交流の友情出演という形での出演・・・今でいえばボランティアという形で演奏会を続けたのです。

—出演料はなにももらえなかったのですか。

そうです。建て前上はその通りです(笑)。もちろん・・・。

大きな演奏会もありました。これは私たちが来日する前に、もう決まっていたそうです。これも

湯川さんの計画だったと思います。いま正確には思い出せませんが、「アジア祭」の「音楽祭」(?) というのでしたか、福岡・名古屋・東京会場と回りました。福岡は市民会館、名古屋は市民第1ホール(?)、東京はサントリーホールの中ホールだったと思います。

この演奏会が終わればもう帰ってもよかったです。他にもいろいろと演奏会が組まれました。また、福岡県内の各種文化・芸能団体等の催しなどにも呼ばれて演奏しました。例えば、お琴のグループの演奏会や、舞踊の会の発表会、詩吟の会などでの演奏もしました。

このような演奏活動をする中で、中国の民族楽器演奏のすばらしさが少しずつ日本人にもわかってもらったようです。このようにして3ヶ月間、月に4~5回の演奏会をしたでしょうか。

このような演奏会をしている中で6月4日がやって来たのです。天安門事件です。

16. 天安門事件

—あの、いわゆる天安門事件と日本に居た趙勇さんたちとどんな関係があるのですか。

これには、いろいろと前後の説明が必要ですが、私にとっては重大な日となったのです。大袈裟ですが。

中国の天安門事件は知っているでしょう。1989年(平成元年)6月4日、中国北京の天安門広場で、中国の民主化を求める学生運動に一般市民も加わる大規模な抗議集会に対して、軍隊が出動して集会参加者に発砲して、多数の死傷者が出ました。

この民主化運動は、5月ごろから始まっており、日本のテレビニュースなどでもよく流れていて、当時私は日本語がわからなかったけれど映像を見てほしいのことは分かっていました。当時、中国ではこんなニュース映像は見られなかったでしょう。10万人を超す大集会です。何度も開かれていたようです。東京でも中国大使館前などで中国人留学生などによる集会もあっていたようです。

丁度このころ、演奏会などで知り合いになっていた中国人留学生から、福岡でも中国人留学生などによる、本国の学生運動に連帯する集会を開くから、参加しないかという電話がありました。そこで私は江舟さんと二人で集会場所である福岡総領事館前に行きました。集会には30人ほど集まっていたと思います。ここにはテレビカメラも来ていて、集会の様子を写していました。私たちは集会が終わって帰った夜、テレビのニュースを見ていると集会の様子が映っていました。その中には私たちの顔もはっきり写されていたのです。そのときは、ああ映っているというくらいで何も考えていませんでした。その後、6月4日の事件が北京天安門広場で起こります。そして、学生たちの運動は抑えられてしまったのです。そして、弾圧が始まったのです。多くの者が調べられ、捕えられ、国外に逃亡した者もありました。

このような中で私たちの観光ビザの期限が近づいてきたのです。もうすぐ帰らなければならないのです。このとき、趙国良さんからもうしばらく滞在しないかという提案がありました。観光ビザは後3ヶ月延長できるのです。私はもう帰るつもりでいました。一緒に来た曾桂芝さんも帰るつもりです。江舟さんは日本に残りたいという。

このような時、中国人留学生に会って話を聞くと、中国では今回の事件に関わったの取り調べが大変厳しいという。私はすぐ国際電話(当時3000円のカードを買って)で中国の友人に様子を聞いてみました。友人が言うには、今は各地で調べが厳しい、少しでも学生運動を支持したり参加した者は厳しく処罰されている。趙勇さんが福岡でそういうことがあったのであれば、今帰るのは難しいだろう。もうしばらく静かになるまで待った方がいいだろうと言う。帰る気持ちでいた私も大

変迷いました。

17. 日本滞在を決断

——帰国間近になって大変なことになりましたね。

そうです。中国に残した家族のことを思うと早く帰りたい。しかし、今帰ると家族やまわりの人たちにも災いを及ぼすかもしれない……。

趙国良さんは、残って私と一緒に頑張ってみないかとも言われました。湯川さんとも相談しました。観光ビザを3ヶ月延長はできる。しかし、その次の延長はできない。3ヶ月延長しても、帰られる状況になっていけばいいが、状況が変わっていなくても観光ビザの場合はもう帰らなければならない。再々延長はできないとのこと。

湯川さんからもう一つの方法が提案された。それは留学ビザを取るのだと言う。留学ビザを申請するためには、本来一度帰国しなければならないが、今中国はこのような混乱の時期なので日本で手続きができるようになったとのこと。留学ビザを取るためには、どこかの学校に入らなければならない。日本語学校に入ったらどうだろう。そうすれば2年間の留学ビザがもらえると。そしてこの2年の間に、日本語をしっかりと勉強しながら演奏活動もできる。日本で生活もできる。

——趙勇さんはどうしましたか。

江舟さんは残るつもりでいます。曾桂芝さんは総領事館の集会には行っていないし、すぐ帰ります。私はいろいろ考え、中国の王艶さんの了解も得て最終的にはしばらく日本に滞在することにしました。

湯川さんに頼んで、江舟さんと私は留学ビザ取得の手続きをしました。同時に二人は、6月から福岡市内の日本語学校へ入りました。留学ビザは2年間有効です。その後更新も可能とのことでした。学校は博多駅近くの「日本語センター」というところです。

——これでなんとかしばらくは、2年間だけど落ち着いて日本で暮らせるようになりましたね。

そうですね。でも三ヶ月間のつもりで日本へ来て、この決断をするのは大変でした。やっぱり家族のことが一番心配でしたね。

日本語学校では、「あ・い・う・え・お」から勉強を始めました。「日本語センター」の校長は元NHKのアナウンサーです。そういう関係でしょう、アナウンサーOBの人たちの授業もたくさんあって、きれいな日本語の朗読なども聞くことができました。

このように学校に通いながら、一方では演奏活動も続けていました。日中友好交流の演奏会として。曾桂芝さんは中国に帰りましたから、江舟さんの琴と私の楊琴と趙国良さんの二胡による演奏会です。今まで、演奏会のマネージャー的なことは金子さんにしてもらっていましたが、この後は趙国良さんの奥さん（愛民さん）が引き受けました。

この間もしばらくは趙国良さんの家で暮らしていましたがその後、別の家へ移ることができました。それは、趙国良さんの知り合いで、南区大橋にお年寄り夫婦二人だけで住んでおられる家の一部屋です。無料で台所付きの部屋に二人で住むことになりました。しかし、それからしばらくすると江舟さんは奥さんにも留学ビザを取らせて中国から呼び寄せ、別にアパートを借りてここを出て行きました。そこで、日本での私一人の暮らしが始まったのです。

18. 日本で暮らしたい

——日本の暮らしはどうでしたか。

このような中で、少しずつ日本の暮らしにも慣れてきました。ここまでには、もちろん失敗や勘違いなどもたくさんありました。食文化も大変に違う。演奏会の後では歓迎の食事会などありますが、必ずお刺身が出てくる。とてもこんなものは食べられなかった。中国では生魚を食べない。生臭いと思った。きまって出てくる火にかけて小鍋の中に入れてから食べていた。今ではお刺身もおいしく食べられます。よその家で風呂に入ったとき、湯船の中で体を石けんで洗い、風呂のお湯を全部抜いて出てきました。後で怒られました。中国には風呂に入る習慣がない。ほとんどシャワーだけです。他にもいろいろありましたが、話せばきりがありません。

私は、日本人の生活の仕方、日本文化のすばらしさ、面白さなど、今までの中国にはない良さをたくさん感じました。中国に帰りたいという気持ちから、いつしか日本暮らしを続けたいという思いに変わっていました。自分自身でも不思議に思いました。

——そんな風に気持ちが変わって行ったのはいつごろからですか。

そうですね。日本語学校に通いだして半年過ぎころからですかね。当時はまだ日本語はよくわからなかったけれど、できれば日本で暮らしたいと思いました。家族も呼んで一緒に生活できればと思いました。子どもも日本で育てた方が幸せになるのではないかと考えました。そこで、王艶さんにもそんな気持ちを電話で伝えました。彼女は「あなたの思い通りやっていいですよ。私はそれに従います。」という返事でした。

このように将来のことも考えながら、日本語の学習と演奏活動を続けて行きました。多久でも3回ほど演奏会を行ったと思います。多くの演奏会をするには新しい曲が必要です。多くの曲を編曲しておかなければなりません。クリスマスが近づくとジングルベルなどクリスマスの音楽を編曲して練習しました。演奏会では大好評でした。

このような暮らしの中で、もっと長く日本に滞在できる方法として、今の留学ビザから就労ビザへと切り替えを行ったのです。そのことが次の多久へとつながって行ったのです。

——留学ビザから就労ビザへの切り替えは簡単にできたのですか。

いいえ、大変難しい。いろいろ条件が揃わないと取得できない。多くの人の助力がなければできなかったのです。

愛民さんと湯川さんが考えて、湯川さんが関係をもっていた多久市文化連盟会長の野方さんや不二見先生に相談したのでしょう。野方さんは入国管理局へも行き、多久市文化連盟でもいろいろ思案し、なんとか二人を多久で引き受けることを考えました。最終的には、多久市文化連盟で雇用するという形になったのです。

——それはいつですか。

そう、平成3年4月です。いろいろと面倒なこともありましたが、多久の皆様の支えがあって、このようにして多久にやっとなられたのです。しかし、更に私たちの身分を安定させるため、翌年からは「財団法人孔子の里」の職員にしてもらったわけです。

(2014. 9. 24)



19、いよいよ多久へ

——多久へ来たのは平成3年4月ですか。最初に住んだのはどこですか。

多久の皆さんの尽力でこのようになりましたので、最初から多久に住もうと決めていました。しかし、多久のことは何もわからないので、先に知り合いになっていた大平庵の木下社長さんをお願いして、家賃は安いところでアパートを探してもらいました。そこが中多久のアパートでした。コンクリートの2階建てで、以前は炭鉱の社宅であつたらしく当時はオーナーの馬場さんが1階に住んでいて、2階が私の部屋でした。

——福岡から多久ではとまどうことも多かったでしょう。

そうですね。しかし、すぐ傍に住んでおられた中島重吉さん（当時市役所勤務の人）が中多久での生活のことなどいろいろと教えてくれました。また、近所の人たちにも紹介してくれたり、大変お世話になりました。最初ですから大変助かりました。

——中多久からだどこへ行くにも歩かなければならなかったでしょう。

そうです。多久へ来てからも、趙国良さんたちとの演奏活動は続けていました。福岡へ出かけることも多かった。バスセンターまで歩いて行きます。演奏会の時は重い楽器（楊琴）を抱えて遠いバスセンターまで歩いたことも何度もあります。汗びっしょりです。当時は、タクシーを呼ぶお金ももったいなかった。足がないと大変不便だということを実感しました。

このようなこともあって、私は今後半年の間（10月まで）に達成したい目標を二つ決めました。一つは、家族を中国から呼ぶこと。二つ目は、なんとか生活が安定したら車の免許を取ること。この目標を決めて日々頑張りました。

——多久に来て、早速目標を立てましたね。まず、第一の目標はどのように進みましたか。

家族を呼んで滞在させるためには、やはり日本人の身元引受保証人が必要です。私はその当時まだ日本語が十分ではなく、自分の気持ちなどをうまく伝えることができなかつた。そこで私のことを最初から知っておられる湯川さんに相談をしました。湯川さんは、快く二人（王艶さん・長男の英傑くん）の保証人を引き受けてくれました。これで家族を呼べるようになったのです。中国の方でも来るためにはいろいろと準備があつて、やっと平成3年10月に来ることができました。このようにして家族三人の暮らしが多久で始まったのです。

——第一の念願がかなってよかったですね。子どもさんは大きくなつていたでしょう。

8歳になっていました。小学校3年になったばかりでした。中国の学校はすべて9月が新学期です。10月に日本へ来ましたから、中国では3年生になったばかりの時です。

こちらでもすぐ学校に入れなければなりません。言葉が一番問題でしたが、野方さんを通して教育委員会へ転入依頼を出しました。中国では3年生になっていましたが、こちらでは北部小学校の2年生のクラスへ編入させてもらいました。

20、運転免許へ挑戦

——家族を迎えて多久での生活が始まったわけですが、二つ目の目標である運転免許の方はどうになりましたか。

家族と暮らせるようになって、私もやっと安心できました。運転免許のことはずっと頭にありました。ちょうどそのころ、同じ中多久に住んでいる西村さん（現資料館館長）からいい話を聞きました。大町自動車学校には中国語が少しわかる先生が一人いますよと。私が一番心配していたのはやはり言葉がわかるかどうかということでした。すぐ西村さんに頼んで、大町自動車学校を紹介してもらい、その中国語が少しわかる先生の担当にしてもらうことができました。12月ごろだったと思います。

大町まではちょっと遠いですが、送迎バスがあるので安心でした。言葉のハンディーはあるけれど、毎日一生懸命頑張りました。マニュアル車とオートマ車がありましたが、私はマニュアル車を希望しました。当時は、先生の指示する言葉も私には難しかったですね。

王艶さんも私のことを心配して、いろいろと応援してくれました。例えば、餃子をたくさん作ってくれて、それを私が学校へ持って行き、先生たちに食べてもらったりしました。本場中国の餃子は皮が厚いと、大変好評でした。学校中の先生たちに食べてもらったと思います。

2ヶ月ほどでほとんどの学習は終わりました。この時期は高校生の教習生も多く、遊び半分です受講している感じの者もありました。一番難しいのはセンターでの学科試験だということです。学科試験を合格するには2～3回はかかるだろうと言われました。それだけお金もかかるのです。学校では1回100問の模擬試験を5回受けました。それを全部できれば合格できるということでした。私はその500問を繰り返し繰り返し覚えることをしました。なんとしても合格したかったのです。

3月にセンターでの学科試験がありました。大町自動車学校の同級生もみんな受験に行きました。試験の後、しばらく待つと合格者の発表がありました。私はできたつもりではありましたが、心配でした。なんと合格者名簿の中に私の名前もあったのです。一回で合格とは私も信じられませんでした。大変嬉しかった。一緒に受験した高校生たちの8割近くは不合格だったとのこと。

——言葉も難解だったと思いますが、よく一回で突破できましたね。それだけ真剣に取り組んだからできたのですね。

そうです。あの500問の問題は全部覚える努力をしました。私がここで合格したことは、佐賀県内で多分最初の中国人合格者だろうと言われました。

後で聞いたことですが、私の合格は大町自動車学校でも喜ばれ、学校の模範生としてみんなに伝えられたそうです。趙勇さんのように勉強すればみんなも一発で合格できるのだと。

——二つ目の目標も達成しましたね。免許証は手に入れましたが、車の方はどうしましたか。

私が福岡で通っていた日本語学校の人が、私の免許取得を知って、学校で不要になって廃車しようとしている車があるが使いますかと聞いてきました。古いがまだ走れるとのこと。ただで譲って

いいですよと言われた。親切を感謝して、私は喜んでその車をもらいました。

免許を取っても初心者ですから、運転に慣れるためにこの車は大変役立ちました。ちょっと傷つけたりもしましたが1年近くは乗りました。その車は、最終的には17万キロ以上走っていました。整備工場で次の車検を通すためには部品交換などに必要な金額で、いい中古車を買えると言われました。

次の車をどうするか、王艶さんに相談しました。彼女が言うには、私たちが自分の車を持って自分で運転できる生活など今まで夢にも思わなかった。それができるようになったのだから新しい車を買ってもいいでしょう。なんとか買えるだけのお金があれば。お金がなくなればまた努力すればいいでしょう。王艶さんのこの言葉に励まされて私も新車を買うことを決めました。

日産の当時発売されたばかりの新型ブルーバードに決めました。当時消費税3パーセント含めて198万円でした。これまでの演奏活動で得たお金です。この車もよく走りました。演奏会で広島往復日帰りのこともありました。8～9年間ほど使ったと思います。

21、長男 英傑君のこと、そして次男 英初君誕生

——日本の小学校へ編入した長男のことは心配だったでしょう。その後どうでしたか。

その時は8歳でした。趙英傑（えいけつ）といいます。もちろん日本語はなにもわかりません。やっぱりそのことが一番心配でした。長男は言葉はわからずとも毎日学校に通いました。ずっと見ていると、嫌な様子も苦しい様子も見えませんでした。この当時はテレビゲームが盛んな時代で、私も甘かったのでしょう、たくさんゲームを買ってやりました。子どもは下校するとすぐゲームで遊んでいました。4～5ヶ月すると、2～3人の友達を家に連れて来るようになりました。これを見て私も一安心しました。

しばらくして担任の先生が家庭訪問されました。先生は、英傑君は日本語を覚えるのが早い、今ではほぼわかるようになっていきますよと。これで私はまた一安心。この先生（小森先生、現中央小教頭）には大変お世話になりました。またその時の校長先生（尾形善次郎先生）も、放課後には長男を校長室へ呼んで、特別に日本語の指導をしてくれました。そのようにして1年経つと長男の日本語は私よりも上手でペラペラになっていました。驚きました。

そのころになると学校へ行くのが楽しいと言うようになりました。その後、中多久から砂原の中島会館へ住まいが変わりました。ここは緑ヶ丘小の校区ですが教育委員会の配慮で転校せずに、卒業まで北部小で過ごすことができました。

中島会館というのは、元炭鉱主の住まいであったものを多久市に寄贈してもらったもので、多久市の施設として使われていました。平成5年、ここの管理人が空席だという情報を得て、不二見先生などの助力により、王艶さんを住み込みの管理人として雇用してもらうことができました。それによって私たち一家はここに住むことになったのです。平成16年まで11年間ほどここに住んでいました。子どもたちもここで育ちました。ここの一室で毎週、私が講師を務める中国語講座も開かれていました。

ところで、私が長男英傑を通して日本の小学校学校教育について感じたこともたくさんありました。最初に驚いたのは、授業中にトイレに行くのを先生が許していること。中国ではこんなことは

ありえない。授業全体が遊びのような感じであった。中国とは全然様子が違っていた。長男も中国での経験もあるので、日本の学校が楽しいと言う。帰ってからも遊ぶ時間が多い。中国では宿題が大変多くて、遊ぶ時間は少ない。

日本の学校教育のいいところはたくさんあると思う。例えば、ほめながら本人のやる気を促すとか、いろいろとを感じるものはあった。中国では日本に比べてもっと厳しい授業のやり方である。時には強制的な部分もある。日本の小学校の教育にはいくらか不満も感じました。

長男は小学校を終えるころには、もう中国の学校には絶対に帰りたくないと言っていました。

このようにして長男は小学校を卒業して、市立中央中学校へ入学しました。中学校では、新しくできたハンドボール部へ友達も誘って入り、部活動に熱中するようになるのです。

家族を呼び寄せて私たちの生活もなんとか落ち着き、日本での暮らしにもなじんで来ました。中国ではそのころも一人っ子政策で、二人目の子供を産むためには大変な覚悟が要りましたが、日本ではそんなこともなくて、日本は幸せだと思いました。私たちも、もう一人ぐらい子供が欲しいと思いました。できれば女の子が欲しいと思っていました。

そんなときに二人目の子どもが生まれることになったのです。私たちは大変喜びました。しかも病院の先生の見立てでは、女の子のようだとのこと。毎月の検診でも女の子だろうと言われていました。私たちもそのつもりでいました。ところが出産間近の検診では、どうも男の子のようですとのこと。男の子が誕生しました。

平成6年9月4日、私たちの二男誕生です。私たちが日本に来て初めて生まれた子どもだということで、英初（えいはつ）と名付けました。長男英傑とは12歳はなれていて、はからずも二人とも成年（いぬどし）生まれとなりました。

——英初君が加わって、趙勇さん一家にもぎやかになりましたね。家での言葉はどうなっていたのですか。

英初が生まれて3歳ごろまでは、両親とも意識的に中国語で育てました。3歳から保育園へ行きましたが、そこでは日本語、家へ帰って来ると中国語です。保育園で友だちとは日本語で、家に帰ると両親からは中国語です。自分では日本語を早口でしゃべるから母親はよくわからない。私が通訳をして中国語で言う。そんな暮らし方だったから今でも英初は中国語もある程度わかります。

22、日本に帰化する

——長男の英傑君は中学校では部活のハンドボール部で活躍していたのですね。

中央中の馬場先生が新しく創部された部活で、長男は友達を誘って遊びの延長のような感じで始めたのです。楽しく練習をしていたようです。練習試合や県大会などよく出かけていました。しかし、試合にはいつも負けてばかりのようでした。3年間練習を続けたのだから当然技術の進歩はあったでしょう。高校進学の時には、ハンドボール部のある、県内や県外の高校の先生から勧誘を受けました。英傑は県内の高校を希望しましたが、私は県外を勧めました。甘えん坊の長男には早く自立をさせたかったからです。最終的には英傑も私の勧めを受け入れて、県外の高校で寮生活することを決断しました。久留米工業大学付属高校（現久留米祐誠高校）に推薦で入学できました。

——中学卒業後、すぐ一人暮らしをさせるのは心配じゃなかったですか。

英傑は親元を離れ久留米で初めての寮生活を始めました。私も初めはどうなることかと少しは心配していました。最初のころは、毎晩のように電話をかけてきていました。そして母親と長く話し

ていました。帰りたいたうのです。寮の公衆電話からで、母親は電話カードをたくさん買ってやっていた。こんなことが半年も続いたでしょうか。しかしいつの間にか子どもの様子も変わってきました。学校や寮の生活にも慣れてきたらしく、愚痴も言わなくなってきました。休暇で帰ってきたときなどは、寮の生活など詳しく話してくれるようになりました。寮生活の決まりなども自分でこなして努力していることがうかがえました。

私はよかったと思いました。これで甘えん坊からの自立はできたと思いました。久留米にやってよかったと思えるようになりました。

長男の英傑が久留米に行ってからしばらくして、王艶さんも車の免許を取りました。私と同じ大町自動車学校へ通って、私と同じ先生に担当してもらいました。彼女はきちんと日本語を勉強したことがないので、言葉で苦勞しました。センターの学科試験に3回通ってやっと合格。しばらくして、三菱の軽自動車を買いました。

この車は王艶さんとともに大活躍をしました。2～3歳になった次男英初を連れて、久留米まで英傑の試合の応援によく通いました。

——英傑君も頑張っていたのですね。ハンドボール選手としても・・・

そうですね。親としてもいろいろな面で進歩がうかがえるようになりました。ハンドボール選手としても実力をつけて行ったようです。英傑は体格もよく、左利きですから左サイドを任されていました。このチームは九州でも実力ナンバーワンと言われ、全国的にも注目されていました。

2年生のとき、監督の先生との面談で、今後の進路についても相談しました。監督の先生は、今の実力であれば十分大学に推薦できるとのこと。そして大学を卒業した後、日本で就職するのか、それとも中国に帰りますかと訊ねられました。私は、日本で就職させたいと思っていました。英傑は、8歳からずっと日本人の中で、日本語で育ってきました。今では、あんまり中国語もわからない。

監督の先生が言われるには、今の実力で行けば大学卒業後の就職もほぼ保証できる。ただ中国国籍のままだったら少し心配です。そして、日本国籍だったら問題ない。日本国籍をとったらどうですかと。

——趙勇さんが日本へ来てから今までの話を聞いていると、来るべきところにたどり着いた感がありますね。日本帰化は趙勇さんも考えていたことではないのですか。

そうですね。しかし、はっきりと意識して考えたのはこのときからです。夫婦でも話し合いました。そして、私たち両方の両親にも話し、意見を聞きました。両方とも猛反対しました。家族でも何度も話し合いました。王艶さんは少し迷っていました。長男は、日本国籍を切望しています。夫婦の話し合いでは、子どもを守るのは親であり、子どもの希望も叶えてやりたい、子どもの将来を考えて帰化を決断しました。その後、中国の私たちの親たちにも説明し、納得してもらいました。

——いよいよ決断しましたね。この申請手続きは難しかったです。よくやり遂げましたね。

私たちもどのような手続きをしなければならぬのか全く分かりませんでした。まずは佐賀の法務局へ相談に行きました。いろいろな書類とともに、帰化を希望する詳しい理由書を書かねばなりません。これはとても私だけでは難しい。そこで弁護士に相談することにしました。王艶さんと二

人で福岡の弁護士事務所（福岡領事館の近く）を訪ねました。今までにも外国人の帰化手続きを経験したことのある弁護士が相談に乗ってくれました。引き受けてもいいが料金は高いとのことでした。王艶さんと相談をして、高くても依頼することを決めました。

弁護士に理由書を書いてもらうため、私たちの今までの経歴やこれからの思いを詳しく話しました。弁護士はそれを元にして私たち四人、ひとりひとりの理由書を書いてくれたのです。平成11年2月に佐賀法務局へ申請書を提出しました。

そのとき法務局からは、審査判定には早くて一年、遅い場合には二年位はかかるだろうと言われました。更に、この間に日本の法律に違反するようなことがあったらダメになるとのことでした。

一方、中国領事館には中国国籍放棄の手続きとパスポートの返納をしなければならなくて、私たちは、単なる日本在留の資格だけとなったのです。

——判定が出るまでどのくらい待ちましたか。

そう、半年もならないうちに法務局から、家族全員で法務局へ来なさいとの要請状が届きました。帰化の可否は書いてありませんでした。子どもたちにも学校を休ませて、みんなで法務局へ行きました。

局長室に招かれて、局長から重々しい口調で「帰化を許可する」という許可の伝達がありました。この後、別の応接室に移りお茶が出されて、懇談の場が設けられました。ここで局長は初めて笑顔を見せて、「よかったですね。これからは一人の日本人として頑張ってください。あなたは、これからも演奏家として活躍してください。」などと、ねぎらいの言葉をかけてくれました。緊張していた私たちもホッとしました。全てが終わって法務局の外へ出ると、長男の英傑は「バンザイ」と叫び、跳び上がりました。

日本への帰化申請の条件の一つに私たちの名前的问题がありました。私たち家族の姓を日本人風の姓に変えなければならないのです。つまり、私の「趙」と王艶の「王」いう姓を廃して、新しい姓を名乗るのです。（中国では結婚しても両者の姓は変わらない。）

実は、中国在住の王艶さんの父親は中国「易経」占いの専門家です。そこで、私たちの姓をどのような漢字で書いたらいいかを占ってもらいました。その結果は、「8画の漢字」が一番いいとのこと。そこでいろいろ考え、最終的には「中井」に決めました。これと同時に私と王艶さんの「名」も「浩司」（ひろし）と「千愛」（ちえ）に決めました（これも「易経」占いにより）。長男と次男の名は今までと変わらず。

私の名前は「中井浩司」（なかいひろし）となりました。

(2015. 1. 22)



23、演奏活動

—多久に来てから、家族と暮らせるようにはなりましたが、いろいろと忙しくなり面倒なことも増えたのではないですか。趙勇さん自身の演奏活動はどうなりましたか。

多久に来てからもずっと趙国良さんたちとの演奏活動は続いていました。また、「財団法人孔子の里」の常務理事である林口彰先生の講演会などでも演奏をさせてもらうことがたびたびありました。

当時、私と江舟さん（聖廟の管理人室在住）は、名目上は孔子の里の職員となっていました。そこでしなければならないことは何もありませんでした。「財団法人孔子の里」の初代常務理事は野方辰美さんで、平成8年からは林口彰さんに替わりました。そのころ林口さんの提案で、二人とも用事がないときは毎日ここ（東原庫舎）へ出勤することになったのです。（これにはいろいろなきさつがあったのですが、複雑になるのでここでは触れないでおきます。）私たちは毎日ここに来て、それぞれ別々の部屋で楽器演奏の練習などをしていました。昼か午後2時ぐらいまではここに居ました。

林口さんは、元社会教育関係の仕事をされていて、当時もあちこちで講演会の講師として活躍されていました。その講演会に私たちも一緒に行って演奏をしたこともありました。私たちを多くの人に紹介し、私たちの音楽活動の場を広めるためです。

—趙国良さんとの演奏会は今までと同じく3人のグループですね。

そうです。しかし、趙国良さんの音楽活動は、私たちとの活動以外にも広がっていて、一人での演奏会も多かったようです。その後、創価学会の「民音」などの支援を得て、活動の場は全国に広がっていたようです。94年11月に私も一度だけ国良さんと一緒に、福岡ドームで行われた創価学会の「アジア青年平和音楽祭」のイベントに出演したことがありました。ドームは満杯で、池田大作会長が入場すると大歓声上がり、わたしは毛沢東を迎えるあの文化大革命の時の様子を思い起こしました。

もちろん、今までのように趙国良さんと江舟さんと私の3人での演奏会は続けていました。その演奏会のマネージャーは国良さんの奥さんである愛民さんがされていました。私は新しく取り入れた日本の曲などの編曲も受け持っていました。

そのころ多久市から国良さんに、多久聖廟をテーマにした多久市の曲の作曲依頼があったのです。国良さんは曲の一部を書いた後、全てを私に投げかけられました。私は、国良さんの書いた部分を元にして、何とか多久市の曲を作り上げたのです。この件に関わって、愛民さんの独断的な行動があり、私が意見したこともありました。このようなことがあってから、愛民さんは私をだんだん遠ざけるようになり、演奏会からも外されるようになりました。そのようにして平成8～9年ころまでは3人の演奏会もなんとか続きましたが、10年以降は国良さんとの演奏会活動は完全になりました。その後は、林口さんの講演会などで江舟さんと私の二人だけの演奏会や、私一人だけの演奏会となっていったのです。

一人だけの演奏には、今まで編曲していた曲をすべて編曲しなおさなければなりません。これも大変でした。

24、「荒城の月」編曲

——いよいよひとりだけでの演奏活動となるのですね。

そうです。国良さんたちとの演奏会がなくなると、時間的にも余裕ができました。そこで、今まで演奏した曲や、その他多くの日本の曲を勉強しなおしました。そして、この楽器・楊琴一台だけでの特徴を出すための方法を考えました。そのための楊琴演奏の技を工夫し、繰り返し練習しました。これには多くの時間をかけました。

——楊琴という楽器の可能性を広げたのですね。

そう言えるのかどうかはわかりませんが、楊琴演奏の技を工夫しました。それと同時に楊琴だけで一曲を完成させるための編曲を考えました。楊琴の演奏技術と編曲の方法で音楽空間を広げ、深めたいと思ったのです。

——趙勇さんの演奏会では童謡がいつも入っていますね。日本の童謡は好きですか。

童謡や日本の歌曲の中にはいいものが沢山ありますね。そんな曲を私一人の演奏のために編曲をしました。この中のいくつかは演奏会に必ず入れています。

この中でも特に「荒城の月」の編曲は思い出深いものがあります。私は日本に来てから今まで様々なことがありました。そこには楽しかったこと、悲しかったこと、頑張ったことなどいっぱいありました。この曲には、そのような時々の自分の思いを込めて編曲しました。編曲しながら立ち止まっては当時の自分のことが思い出されて涙ぐむこともありました。そのような気持ちを楊琴演奏の技と編曲の仕方に込めました。自分の力を精一杯傾けました。完成した時には涙がぼろぼろこぼれました。

——そう、この曲が完成して間もなくのころの演奏会だったと思います。聴く人の何人もが涙ぐんでいるのを見たことがあります。趙勇さんの「荒城の月」は聴く人の心に響くのです。

ありがとうございます。私も演奏会でそんな光景を何度も目にすることがあります。私自身もこの曲を演奏するときには、涙がこみ上げてきます。それだけ強く私の思いを入れたのです。演奏会の後では、この曲の感動を私に語ってくれる人もありました。

この曲以外にも、日本や中国の曲を楊琴だけの演奏用に編曲しました。一回のコンサートを楊琴だけでできるようになりました。演奏の後で、とても一台の楽器だけの演奏とは思えないとか、編曲が素晴らしいと感想を話してくれる人もありました。

25、来日当初の王艶さん

——ここまで、趙勇さんが日本にご家族を呼んで、多久に落ち着くまでのいろいろなお話を聞いてきました。話は少し前後しますが、奥さんの王艶さんは来日当初大変とまどわれたのではないですか。趙勇さんも、子どもさんと奥さんを日本の生活に慣れてもらうためには大変だったと思います。

そうです。家族を呼んだのは平成3年10月22日でした。子どものことは先に話したように、すぐ学校にもなじんで行きました。

王艶さんは最初のころ、一人では家の外に出られなかった。言葉は分からないし、日本のことは何もわからない。私が一緒に連れて買い物などに行っていました。そんな中で少しずつ日本の習慣なども教えていました。中多久のアパートでは、近所の奥さんたちにも紹介して私が通訳をして話すこともありました。

彼女は、中国で出された日本語会話の教本を持って来ていました。それなども使って、家では私が教えたりしていました。私は、一日でも早く彼女に日本語に慣れてほしいという思いがありました。だけど、短時間では難しいことも分かっていたのですが、子どものことと王艶さんのことで、しばらくは大変な時期もありました。

そうですね。2～3ヶ月たったころ王艶さんは中国に帰りたいと言ったことがありました。中国では友だちも沢山いて、おしゃべりができた。ここでは毎日同じ環境で、目の前にはいつも主人が居るだけで何も変わらないと言う。一番つらいことは日本人に接しても、うまく言葉が出ないし、友達がないということでした。

——王艶さんは、もともと琵琶奏者だったんですね。演奏活動などはできなかったのですか。

とても来日したばかりでそんなことはできませんでした。しばらくして、相知町にお住まいで当時県庁にお勤めだったと思いますが、小柳勉さん（現玄海町教育長）の計らいで、相知町のお祭りの時に王艶さんと二人の演奏会を作ってもらいました。公民館で2～300人の会場だったと思います。

この演奏会の後、ちょこちょこと二人の演奏会も持てるようになりました。例えば、黒髪山の近くの町（山内町？）で、大正琴の先生の招きで演奏したこともあります。

——ちょこちょこでも演奏会が持てるようになったことは、王艶さんにとっては大変良かったのではないですか。

そうです。毎日同じ人の顔ばかりを見ているよりは、多くの日本人に接して日本のことも少しずつ分かってきたようです。日本語にも少しは慣れてきたようですが、なかなか自分ではうまく話せない。このころの王艶さんの気持ちは、私にもよく分かります。それから半年ほどすると言葉も少しはできるようになって来ました。

そのころ、家で食事の時などに三人でよくこんな冗談を言い合っていました。「今からすぐ中国へ帰りたい人は手を上げてください」、すると王艶さんが手を上げます。そして「中国へ帰りたい人は手を上げてください」、すぐ長男と私が手を上げます。「二対一で私たちは中国には帰れま

せん」となるのです。長男は帰りたくなかったのです。日本の学校が気に入っていたのです。

こんな王艶さんも、毎日家では子どもと私のために愚痴一つなく家事をこなしてくれていました。更には、私のいうこともみんな受け入れて、子どものために思い、よく頑張ってくれました。王艶さんは本当に優しい。

26、王艶さんの活躍

— 私たちも長く王艶さんとお付き合いをして来て、いつもそれは感じていたところですが。王艶さんは優しいですね。日本の女性が持っていたような優しさというか・・・そんな優しさを感じます。

そこで、私がやってよかったと思ったことがあるのです。それは丁度そのころ、多久市にいわゆる中国残留孤児の家族がたくさん住むことになったのです。東多久別府の市営アパートです。多いときは7～8世帯ありました。

その時、県から私に彼らの自立指導員になってくれないかという依頼がありました。孤児の家族が早く日本社会になじみ、自立できるように援助をする仕事です。わずかですが手当もありました。私はそれを引き受けました。

当時、彼らは日本のことは何もわからず、みんな生活保護を受けていました。そんな彼らに日本の暮らし方を教え、日本社会の中で自分の適性を見つけて生活保護を脱し、早く自立できるように支援するのです。そのためには、彼らの家を訪問し、彼らの話を聞き、いくらかの助言をするというのが主たる仕事です。私はこの仕事のときには、この仕事の意義をしっかりと伝えて、いつも王艶さんを同道するようにしました。

彼女はこれによって中国語で話し、交流できる場面ができたのです。ただ彼らは中国各地方から来ているので、地方の言葉（方言）があつて分かり難いところもありました。しかし、王艶さんにとっては中国語でしゃべれて、少しは楽しくなったようです。

この仕事を続ける中で、私に代わって彼女にもいくらか分担してもらうことを考えました。そのためにはもう少し日本語が上達することと、どうしても車が必要になります。そこで以前に話したように、私と同じ大町自動車学校に通い平成7年に免許証を取得し、すぐに軽自動車を買いました。

— そうでしたね。この車は長男英傑君の久留米の学校とか試合の応援に大変活躍したと聞いていたが、それだけではなく、この仕事でも王艶さんと共に働いたのですね。

そうです。この車で必要なときには彼女一人ででも家庭訪問ができるようになりました。後には彼らを連れて、仕事の紹介で多久や佐賀の職業安定所（ハローワーク）などにも何回も通っています。この車が彼女の世界を広げてくれたのです。

この仕事を通して彼女の気持ちも明るく安定して行ったと思います。私たちは孤児の家族を訪問し、日本文化や日常生活のルールなども教えて回りました。

— 大変な仕事だったのですね。この間には王艶さんの日本語も大分上達したのではないですか。

そうですね。彼女の日本語が上達したのは、なんと言っても日本人と接する場面が多くなったことです。

いろいろありますが、先ず一つは中多久から中島会館に引っ越したことです。先に話したと思いますが、王艶さんを夜間の管理人として雇ってもらったために私たちはここに住むこととなったのです。ここには笹沼松子さんという方が、昼間の管理人として通って来ておられたのです。会館で特に行事がないときなど、笹沼さんは王艶さんと呼んで日本語で話しかけ、二人で過ごす時間が

多かったのです。そんな中で王艶さんの日本語も上達していったのです。笹沼さんからは言葉だけでなく、多久のことや日本の生活習慣などいろいろと教えてもらったのです。

次男の英初もここに来てから生まれたので、笹沼さんにはずっとお世話になり、我が子のように可愛がってもらいました。英初も笹沼さんには大変なついていました。この笹沼松子さんと日常生活を通してのお付き合いで、日本語も上達していったと思います。

そのころ、会館では編み物教室が開かれていて、それにも参加していました。王艶さんは中国でも私のセーターなど編んでくれていましたので興味があったのです。中国での編み方と日本の編み方には違いがあって、問われて中国の編み方を教えたりもしていました。ここでは日本の女性の仲間もできて、日本語でも楽しく交流できるようになったのです。

——やはり多くの日本人と接することで日本語も身について行ったのですね。

同時に、日本人の友人もできて、楽しく日本でも暮らせるようになって行ったのです。

また、平成8年には林口常務理事の発案で、王艶さんの中国料理教室が発足しました。大きなポスターまで作られ、ワンコイン（500円）の参加料で募集されました。多久市以外からも参加者があり、30人以上集まったと思います。林口さんのねらいは、多久市民に異文化交流の場を作るということと、王艶さんが楽しく料理を教えながら、わずかでも収入を得られればというところでの発案だったのです。

その他、中島会館では私が講師をする中国語教室が開かれていましたが、ここでも私に代わって王艶さんに務めてもらうこともありました。

このような暮らしを続ける中で、中国に帰りたいたいという気持ちがあった王艶さんも、いつしかだんだんと多久が好きになってきたのです。

王艶さんは中国にいるときから料理作りは好きで、興味を持っていたのです。

父親は中国での調理師免許を持っている人です。父が家で料理をするときは王艶さんも手伝いながら、いろいろと教えてもらっていたそうです。それで中国料理には詳しくて、日本に来てからは和食についても関心があります。だから、和食の料理の本もたくさん買って、実際にいろいろ作って試してみています。

その中で気づいたことは、味も違うがやはり中華料理は油を多く使い過ぎているということでした。そこで、だんだん油を控えめにして、味は美味しくてさっぱりした中華料理ができたということです。今では、中華と和食の作り方を混ぜていろいろな味を工夫しています。

餃子の作り方も中華は皮が厚い、日本は大変薄い。食べ比べると中華は味があり、日本のは味がない。中華は一つ一つ手作りで、日本のは機械での大量生産でしょう。王艶さんも日本人好みに皮を少し薄くしながら味のある餃子を作るようになりました。

(2015、3、24)



27、多久定住を決める

——趙勇さんの今の家は、1階が王艶さんの中華料理店「大清花」になっていて、2階がお住まいですね。これはいつ建てられたのですか。王艶さんが中華料理店を始めるというのも大変な決断だったのではないですか。

平成15年・・・そうです。王艶さんもなんとか日本の様子がわかるようになり、子どもたちのことやこれから先のことを二人で話し合いました。

王艶さんは、多久に定着するなら中華料理店を開き、ここを拠点にして頑張りたいとのことでした。彼女は前にも話したように、料理をするのは好きで得意にしていました。中島会館にいるときから中華と和食の味付けで、日本人の口に合う料理などいろいろ試していました。

そのためには、拠点となる家と店が必要です。当時は厳しい状況でしたが、銀行のローンを組んで、二人とも頑張ろうと決断しました。

そこで早速、適当な場所・土地を探しました。北多久町高木川内にもともと田んぼだったところで、広く整地されて売り地となっていたところがありました。道路に面したその一面を買うことにしました。その当時、周りには1軒の家があるだけで、広々と田んぼが見渡せるような所でした。少し先には、アパートや学校やほか弁屋もありましたので、なんとかここで店を開くことを決めました。(今では、周りにも沢山家ができました。)

平成15年1月に多久市の秀島建設に依頼して、8月に着工しました。2階建てで、1階を店にして2階を住まいとしました。当時は、長男は就職したばかりで福岡に住んでいました。次男は緑ヶ丘小5年生でした。

——念願の王艶さんの店もできたのですね。

16年4月1日、中華料理店「大清花」をオープンしました。それからもう今年で11年目、12年目に入ります。早いですね。あっという間に過ぎてしまいました。

そのころは、多久市や近隣の町にも中華料理店はありませんでしたので、多久以外のところからお客さんが来てくれました。佐賀市からのお客さんもありました。

王艶さんの料理も最初のころは、日本人の口に合うように工夫しながらも、つい油などを多く使い、中国的な味になってしまうこともありました。その後いろいろと工夫を重ねて、王艶さん独特の味の中華料理を作り出しました。日本人にも好評でした。

餃子にしても、前にも話したように、中国の餃子は皮が厚いと言われる。(中国は水餃子が中心。)日本の餃子は皮が薄い。王艶さんはその中間の厚くなく薄くない、更には中の餡(あん)も工夫して日本人にもおいしいといわれる餃子を作りました。全て手作りです。これはお客さんには大好評で、遠くから定期的買いに来てくれる人もありました。

— 私たちもよくお世話になります、普通の食堂形式の部屋と円卓を囲んで宴会ができる部屋がありますね。これもいろいろ工夫されたのでしょうか。

この店内の作りは大変考えました。料理の味と一緒に雰囲気全てで中国を味わってもらえるような工夫を考えました。そこで、店内の調度、食器、テーブル、椅子など全て中国から取り寄せました。また、音楽が流せるように音響装置も備えました。私の演奏曲とか中国の音楽が食事をしながら楽しめるように工夫しました。

(ちょうどこの対談をしているとき、趙勇さんの携帯電話が鳴り、ちょっと中断して趙勇さんの対応が終わるのを待ちました。)

王艶さんからの電話で、今日は冷蔵庫を新しく買うため、家電店に見に行く予定だったが、いつごろ帰って来ますかとの電話であったとのこと。

もう11年使い続けてきた店の営業用の冷蔵庫が不具合になって、修理しなければならないが、このまま修理して使っても電気代が高い(月2万円程)。この大きな営業用でなくても大型の家庭用冷蔵庫で間に合うのではないかと考えた。今の家電は省エネ仕様になっているので、電気代も節約できるのではないかと考えた。こんなことで、冷蔵庫を見に行くことにしているとのこと。

— そういえば、店の入り口には対の大きな石彫りの獅子(?)が鎮座していますが、これも中国から取り寄せたのですか。お店に入る前から中華気分になるように……。

そうです。大理石の獅子です。中国では店に限らずいろんな建物の玄関にはよく獅子が置かれています。悪いものが家の中に入らないようにするためです。

この獅子も含めてほとんどの物を中国で買って送りましたので、運賃が大変高くつきましたね。

— もう11年以上も営業を続けてこられたというのは、多久の中華料理店としてしっかり定着したのですね。

そうですね。王艶さんも頑張ったし、私も応援してきました。なじみのお客さんもできて、なんとか今日までやって来られました。多久日中友好協会や会員の皆様方の応援もありました。遠くからのお客さんもありますが、経営面ではやはり厳しいところもあります。冷蔵庫の電気代でも節約をしたいのです。

今、次男が大学3年生(日体大、ハンドボール)で、あと2年位は経済的にも応援しなければなりません。王艶さんは中華料理で、私は演奏活動で、今は二人とも明るい気持ちで頑張っています。

28、多久日中友好協会の活動の中で

—中国民族芸能の導入—

— 趙勇さんは多久に来てからずっと多久日中の活動にも参加してこられたし、また積極的にリードしてこられた面もありました。20年以上の多久日中の中で、心に残る活動とか、出来事とか、人と

かありましたら話してください。

うーん、たくさんの方にお世話になりました。もう亡くなられた方もいらっしゃいます。

すぐ頭に浮かぶのは不二見達朗先生（元多久北部中学校校長）のことです。不二見先生には多久に来た最初のころからお世話になりました。孔子廟をはじめ、多久のことについて大変詳しくて、多くのことを教えてもらいました。文化連盟の会長もされたと思いますが、多久の人々を愛し、多久の文化レベルの向上を念じておられたように思いました。

後に体調を崩されて入院されたところにお見舞いに行きました。病室に入ってびっくりしました。ベッドから見えるところの壁には、たくさん多久孔子廟の写真が貼ってありました。どこからでも孔子廟が見えて、孔子廟と一緒に居ることで心が落ち着くとのことでした。その後亡くなられましたが、孔子廟を誰よりも心から愛しておられたことがわかりました。

私も多久に来た最初のころから、孔子廟とはいろいろな面に関わってきましたので、孔子廟は私にとっても大事な存在ですね。

——私たち多久日中友好協会の活動も、多久孔子廟（聖廟）を抜きにしては語れません。そして、その活動の中には、いつも趙勇さんが在りました。趙勇さんは財団法人（現公益法人）「孔子の里」に属しておられるので、聖廟はいつも身近にあるのですね。

いままで、多久市の文化的行事や「孔子の里」のイベントなどでは趙勇さんが精力的に関わってきたものがたくさんありますね。いまでは、多久聖廟のお祭り 稷菜（せきさい、春・秋の2回）には欠くことのできない「稷菜の舞」や「腰鼓（ようこ）」、「獅子舞（ししまい）」などもそうですね。

これらはみんな、中国の伝承民族芸能ですね。古くから中国で演奏され、舞い続けられてきているものです。それらの一部を聖廟のある多久でも演じられるようにして、お互いに日中友好交流を深めようということです。

「稷菜の舞」は平成7年からですね。そうです、平成5年（1993年）に以前から孔子廟をとおして交流を続けていた中国曲阜市と多久市との友好都市の締結がありました。その文化交流の一環として「孔子の里」が導入を決めたのです。

——両市が友好都市の締結に漕ぎつけたのは平成5年です。多久市日中友好協会はその10年ほど前から孔子の生誕地・曲阜市とは民間交流に取り組んでいました。この友好都市締結を具体的に市民の目に見えるようにしてくれたのが、この「稷菜の舞」ですね。これを多久で演じるための準備は大変だったと思いますが・・・。

この舞は、曲阜の孔子廟で二千年来舞い続けられて来たものです。これを舞うためには、衣装や道具類も全て中国から取り寄せなければなりませんし、指導者の招聘も必要でした。そのため事前協議や曲阜市との交渉などを何度も経て、やっと実現できたのです。

受け入れ側としては、実際にこの舞を舞う地元の人が必要です。市民や色々な団体に呼びかけて40数名が集まったと思います。そこで、曲阜市から5人の指導者に来てもらい、一か月間ほど実技指導をしてもらいました。そして、秋の稷菜で最初の舞を披露できたのです。

この舞は、曲阜の孔子廟では「孔子舞」と言われていますが、多久では「稷菜の舞」と名付けています。毎年、稷菜では市民によって舞われています。

この「稷菜の舞」より2～3年前に「腰鼓」や「獅子舞」も中国の専門家の指導を受けて、市文化連盟や「孔子の里」により導入されて、今では市民にも親しまれています。（詳しくは、「孔子の里」のホームページにあります。<http://www.ko-sinosato.com/>）

—これら中国の民族芸能を多久に定着させ、今も市民を通しての日中文化の交流が行われているというのは大変貴重なことですね。これには、多久市や多久日中友好協会と共に趙勇さんの尽力があったからのことですね。

いやいや、私も多久日中友好協会の活動には、多久に来た最初から参加させてもらってきました。そのころは、多久には中国と何らかの関わりを持った人たちが、また中国を本当に愛している人たちが沢山いらっしゃいましたね。(今は、もう亡くなられた方も多いですが・・・)

だから、私も大変気持ち良く日中の活動には参加できました。その中で、多くの多久市民の皆さんとも知り合いになりました。なんとか多久の皆さんの力になりたいという思いで、この伝承民族芸能の導入にも取り組めたのです。

中国と多久の皆さんが仲良く交流できるのは、この民族芸能だけでなく、もう一つは、今の中国を知ることだと思います。そのためには実際に中国へ行き、自分で中国を見ることだと思っています。これが私の考えです。

—日中友好 草の根の旅—

—そうそう、趙勇さんは今まで毎年のように多久市民を連れて中国旅行をしていますね。趙勇さんと一緒に中国旅行をしたという人はたくさんいますよ。多久の人だけでなく、小城や佐賀にも。

そうですね。もちろん私一人でするものではありません。多久市や日中友好協会や孔子の里など、いろいろな団体で中国旅行を計画して、その案内役をつとめてきました。

本当の日中友好は、両方の市民が互いに顔を合わせて、お互いを知ることから始まるのだと思います。そのお手伝いをしてきたのです。

日本人も中国の文化遺産や史跡のことはよく知っていますね。それを実際に自分の目で見て、実感してもらいたいのです。更にまた、そこで暮らしている今の中国人と接することで、中国及び中国人を知り、本当の交流が深まるのだと思います。そんな思いで多くの人たちの中国旅行を案内してきたのです。

—今年も計画されていますね。もうすぐ7月になったら。北京・ハルビン・長春の五日間ですね。

そうです。今、準備をしているところです。そう、私たちの中国旅行では、北京に滞在するときには必ず孔徳懋(こう とくぼう)女史にも会うようにしていますね。

孔徳懋(こう とくぼう)女史は、孔子の直系子孫77代に当たる方で、多久市・多久日中とは平成元年に女史が初めて来多久されてよりの交流が続いています。今までに3回多久に来られました。多久からも機会あるごとに女史を訪問して親交を深めています。今は98歳になられるはずで、北京で元気にお暮らしです。

そんな長い多久とのお付き合いがあるためか、「多久は私の第二の故郷です」というお便りを頂いたこともあります。孔子廟がとりもつ縁です。

—今回も北京に行かれますが、孔徳懋さんにはお会いできますか。

はい。旅程の四日目に女史を囲んでの夕食会を予定しています。みんな楽しみにしています。

—多久日中では、この孔徳懋さんとお付き合いには、更にもう一つ先へ進む経緯があります。詳しく

く話すと長くなりますので、経過だけを言います。

孔徳懋さんは孔子直系子孫77代ですが、79代の直系子孫が確定されたのです。以前は中国におられたそうですが、今は台湾在住で、孔垂長（こう すいちょう）といわれます。この方と4年ほど前に北京で、多久市長も一緒にお会いすることができました。そこで、今後とも孔徳懋さんと同じように多久市・多久日中と交流を続けることを約束したのです。

このような経過を踏んで、この後すぐに「多久市民の翼」旅行団を組んで台北へ行き、孔垂長さんに面会したのです。その後すぐに今度は孔垂長さんが多久を訪問する予定でしたが、これは都合がつかず直前に中止されました。

趙勇さんは、この孔垂長さんとの件では最初から関わり尽力されてきましたね。大変ご苦労だったと思います。

そうですね。いよいよ多久へ初めて来てもらうと言うことで、大変期待をしていました。講演会も予定していましたが、直前に取り止めになって残念でした。今後とも、北京の孔徳懋さんと同様に台北の孔垂長さんとの交流も続けたいですね。

——聖廟と「参列生徒の唱歌」——

——趙勇さんにはこれまでもいろいろなことで骨を折ってもらいましたが、最近のことで心に残っていることがありましたらお聞かせください。

そうですね。これはなんとなく気になっていて、私の心の中では結末が付いてないような感じなのですが……。もう4～5年前からのことですかね。いま、正確に日時は思い出せませんが……。

それは、市内のお年寄りたちが子どもの頃歌っていた歌を、今によみがえらせて歌う取り組みです。孔子廟に関係するものですね。今、分かっているのは「参列生徒の唱歌」という題で、昔の小学生たちが孔子廟にお参りに行くとき歌っていた歌だそうです。今では誰の作詞・作曲なのかも分かりません。

今ではほとんど忘れられていて、何人かのご老人が覚えていて口ずさむことができるということです。当時北部小学校教頭先生であった峯 晋先生がご老人の歌う歌から、歌詞とメロディを聴き取り採譜されたのです。私はその歌詞と楽譜をもらいました。それを今に歌いやすいように前奏、間奏などを入れて一編のピアノ伴奏の曲として編曲しました。その楽譜を再び峯先生にお渡したのです。峯先生はその譜面を中部小へ渡したとのことでした。

その後、中部小では歌われていたそうです。また、中部小校区の老人クラブでも歌われて、ご老人たちは大変歌いやすくなったと喜んでおられました。現在、西溪校の小学生には歌われているそうです。また釈菜のときにはみんなで合唱もしていますね。

——これは大変いい話ですね。昔から多久の人たちは、子どものころから多くの人たちが聖廟にお参りに行っていたということですね。また、そこには聖廟を讃える歌があって、みんなが口ずさんでいたのですね。

昔から聖廟と地域の人たちの結びつきがあったということです。また、多久の多くの皆さんがこの歌を口ずさめるようになったらいいと思いますね。私は、この歌を市内の全小学校で、歌えるようにしたらいいのではないかと思いますね。強制はできませんが。多久の音楽の教材として小学生から歌うのです。多久の文化ですよ。

——そう、多久の文化ですね。昔から歌われていて、今は消えかかっている歌を再びよみがえらせて、

更に次の世代に伝えていくのです。

私がこれを編曲するときの思いです。なんとか次の世代にも受け継いでもらいたい。そんな思いで、力を入れて編曲しました。

—ここまでの趙勇さんの話を聞いていると、以前に話してもらった「満族舞曲」作曲のころのことを思い出しますね。これも忘れ去られようとしていた満族の民族音楽を今に甦らせたのですね。趙勇さんの話す熱意も、その時とそっくりで熱がこもっていましたよ。趙勇さんにとっては、やはり音楽に関わることはおろそかにはできませんね。

それはそうと、やはりこの「参列生徒の唱歌」はきちんと整理して残されなければなりませんね。今、どうなっているのかわかりませんが、いつ、だれ（峯晋さん）によって採譜され、だれ（趙勇さん）が編曲したのか、楽譜もそろえておくべきでしょう。

また、この歌の前史も調べられるだけは調べて、元の歌は誰の作詞・作曲だったのか。どのような形で歌われてきたのか等、一つの郷土資料として残しておくべきでしょうね。それは、趙勇さんの仕事ではないけれど。

そう、どこかできちんと整理されて整えておかなければなりませんね。更にこの歌を多久市に広める方法としては、これのCDを作って学校や必要な団体に配ることもできるでしょう。いずれにしても、これは多久の文化として大事にしたいと思いますね。

「趙勇さん大いに語る」終了にあたり

ひとまずこのあたりで趙勇さんの語りに一息入れてもらうことにしました。

趙勇さんご苦労様でした。実は、これまでに文字に起こしてきた何倍ものことを趙勇さんは話してくれました。それを私たち聞き手は、なるだけ時系列を追って趙勇さんの動向がわかるような部分にこだわって記録してきました。趙勇さんには、もっとここに書いてもらいたかったこともあったかと思えます。また、もっと話したいこともあったはずです。

例えば、二人の息子さんたちのことなどは、折々の場面で触れられましたし、また孔子廟、孔子の里、そして多久市のことなど、まだ触れたいことがたくさんあるようでした。更には、毎年行っている中国旅行団の引率などを通して、変わりゆく中国についての趙勇さんの感想なども聞いてみたかったところです。

また、この数年来の日中間のぎくしゃくした関係には、趙勇さんにもいろいろとお考えがあるようでしたが、その件には触れないで来てしまいました。

このように、まだまだ趙勇さん（中国と日本を体験している）には語ってもらいたい、聞いておきたいことも沢山ありますが、あまりに長くなってしまいましたので、ここで終了と致します。

今後機会があれば、趙勇さんの了解を得て、続編を続けたいものだとも思っています。

尾形 節子（多久地区日中友好協会）

犬山 俊郎（小城地区日中友好協会）

（2015. 5. 26）